



NEW ARTISTS ASSOCIATION
TOKYO JAPAN

SVIATOSLAV

RICHTER

СВЯТОСЛАВ

РИХТЕР

1974

**SVIATOSLAV
RICHTER**



4月19日(金)	7時	東京	東京文化会館	主催=毎日新聞社・新芸術家協会
4月20日(土)	7時	藤沢	藤沢市民会館	主催=藤沢市・藤沢市民会館友の会 後援=毎日新聞社
4月22日(月)	7時	名古屋	名古屋市民会館	主催=CBC中部日本放送
4月23日(火)	6時30分	浜松	浜松市民会館	主催=日本楽器
4月30日(火)	7時	大阪	大阪フェスティバルホール	主催=毎日新聞社・大阪コンサート協会
5月2日(木)	7時	大阪	大阪フェスティバルホール	主催=大阪勤労者音楽協議会
5月4日(土)	7時	京都	京都会館	主催=京都コンサート協会
5月7日(火)	6時30分	金沢	金沢市観光会館	主催=石川テレビ放送・北陸中日新聞社
5月9日(木)	6時30分	長野	長野市民会館	主催=NBS長野放送
5月11日(土)	6時30分	仙台	宮城県民会館	主催=TBC東北放送
5月12日(日)	2時	盛岡	岩手県民会館	主催=IBC岩手放送
5月14日(火)	7時	東京	東京文化会館	主催=毎日新聞社・新芸術家協会
5月15日(水)	7時	東京	東京厚生年金会館	主催=毎日新聞社・新芸術家協会(二重奏)
5月16日(木)	7時	東京	東京文化会館	主催=毎日新聞社・新芸術家協会
5月18日(土)	7時	東京	東京文化会館	主催=毎日新聞社・新芸術家協会
5月20日(月)	7時	東京	東京文化会館	主催=都民劇場
5月21日(火)	6時30分	新潟	新潟県民会館	主催=新潟県民会館
5月23日(木)	7時	東京	東京文化会館	主催=毎日新聞社・新芸術家協会
5月25日(土)	6時45分	千葉	千葉県文化会館	主催=千葉県教育委員会・千葉県文化会館(二重奏)
5月28日(火)	6時30分	岡山	岡山市民会館	主催=西日本放送・岡山音楽愛好家協会
5月30日(木)	6時30分	広島	広島郵便貯金ホール	主催=RCC中国放送
6月1日(土)	7時	東京	NHKホール	主催=毎日新聞社・新芸術家協会
6月2日(日)	7時	横浜	神奈川県立音楽堂	主催=神奈川県立音楽堂・新芸術家協会
6月3日(月)	7時	大阪	大阪フェスティバルホール	主催=毎日新聞社・大阪コンサート協会
6月5日(水)	7時	東京	東京文化会館	主催=毎日新聞社・新芸術家協会

提供=新芸術家協会

April	19	Fri.	7:00p.m.	TOKYO	Tokyo Bunka Kaikan
April	20	Sat.	7:00p.m.	FUJISAWA	Fujisawa Shimin Kaikan
April	22	Mon.	7:00p.m.	NAGOYA	Nagoya Shimin Kaikan
April	23	Tues.	6:30p.m.	HAMAMATSU	Hamamatsu Shimin Kaikan
April	30	Tues.	7:00p.m.	OSAKA	Osaka Festival Hall
May	2	Thur.	7:00p.m.	OSAKA	Osaka Festival Hall
May	4	Sat.	7:00p.m.	KYOTO	Kyoto Kaikan
May	7	Tues.	6:30p.m.	KANAZAWA	Kanazawa-shi Kanko Kaikan
May	9	Thur.	6:30p.m.	NAGANO	Nagano Shimin Kaikan
May	11	Sat.	6:30p.m.	SENDAI	Miyagi Kemmin Kaikan
May	12	Sun.	2:00p.m.	MORIOKA	Iwate Kemmin Kaikan
May	14	Tues.	7:00p.m.	TOKYO	Tokyo Bunka Kaikan
May	15	Wed.	7:00p.m.	TOKYO	Tokyo Kosei-nenkin Kaikan (DUO)
May	16	Thur.	7:00p.m.	TOKYO	Tokyo Bunka Kaikan
May	18	Sat.	7:00p.m.	TOKYO	Tokyo Bunka Kaikan
May	20	Mon.	7:00p.m.	TOKYO	Tokyo Bunka Kaikan
May	21	Tues.	6:30p.m.	NIIGATA	Niigata Kemmin Kaikan
May	23	Thur.	7:00p.m.	TOKYO	Tokyo Bunka Kaikan
May	25	Sat.	6:45p.m.	CHIBA	Chiba-ken Bunka Kaikan (DUO)
May	28	Tues.	6:30p.m.	OKAYAMA	Okayama Shimin Kaikan
May	30	Thur.	6:30p.m.	HIROSHIMA	Hiroshima Yubin-chokin Hall
June	1	Sat.	7:00p.m.	TOKYO	NHK Hall
June	2	Sun.	7:00p.m.	YOKOHAMA	Kanagawa Kenritsu Ongakudo
June	3	Mon.	7:00p.m.	OSAKA	Osaka Festival Hall
June	5	Wed.	7:00p.m.	TOKYO	Tokyo Bunka Kaikan

ベートーヴェン・プログラム

ソナタ 第30番 長調 作品109

ソナタ 第31番 変イ長調 作品110

ソナタ 第32番 ハ短調 作品111

BEETHOVEN PROGRAM

Sonata No.30 in E major, Op.109

1. Vivace, ma non troppo.
2. Prestissimo.
3. Andante molto cantabile ed espressivo.

Sonata No.31 in A flat major, Op.110

1. Moderato cantabile molto espressivo.
2. Allegro molto.
3. Adagio ma non troppo—Arioso dolente
—Fuga: Allegro ma non troppo—Arioso dolente—Fuga.

Sonata No.32 in c minor, Op.111

1. Maestoso—Allegro con brio ed appassionato.
2. Arietta con variazioni: Adagio, molto semplice e cantabile.

☆ソナタ 第30番 長調 作品109

このソナタは、1820年秋に書きあげられた。「ミサ・ソレムニス」と並行して書かれていたわけである。晩年のベートーヴェンは、幻想的で神秘的な変奏曲と思索的・論理的な対位法的書法(とくにフーガ)とを対立させることによって音楽の展開をはかることを好んだ。この曲でも、そうした傾向がはっきりとでている。しかも、円熟した技法を用いながら、運命に一切をゆだね、静かな生活にひたりきろうとして、ときには反抗してみたりするものの、むしろ祈りあげるといった感じの面をみせる曲である。

第1楽章 ヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロoppoで、ソナタ形式というよりもロンド形式に近い構成をとる。急速な第1主題がまず示され、すぐにゆるやかな祈るような感じのアダージョ・エスプレッシーヴォの第2主題があらわれる。そして、この二つの主題を扱って曲はすむ。

第2楽章 プレスティッシモで、前の楽章から休みなしにこの楽章からはじまる。ソナタ形式をとり、性格的にはスケルツォに近い。

第3楽章 アンダンテ・モルト・カンタービレ・エスプレッシーヴォで、ベートーヴェンの晩年の様式を如実に示すような崇高で感動的な変奏曲である。主題は、《歌われるように、心からの感動をもって》と記されており、荘重でやさしく、しかも対位法を用いて立体感をだしている。第1変奏は、特徴あるワルツ風の伴奏の上に主題の旋律を抒情的に深みながら、右手と左手を交互に動かしながら、軽快な感じで主題のおもむきをそれとなく伝える。第3変奏は、速度を増し、2重対位法を用いている。第4変奏は、速度を落とし、和声面でわずかに主題を暗示する。第5変奏は、ふたたび速度を高め、2重フーガ風になる。第6変奏は、また速度を落とし、細かい音の動きの上で主題旋律を暗示する。間もなくトリルが入ってきて、その上下を細かい音符が動き廻る。そして最後に、トリルが終り、主題が明瞭に姿をみせて、曲は終りを告げる。

☆ソナタ 第31番 変イ長調 作品110

ベートーヴェンは、このソナタに対するスケッチを1819年ごろからはめている。しかし、完成はも

っとおくれて、1821年のクリスマス(一説では12月28日)となった。それでもさらに翌年に入ってから、アダージョとフーガに手を加えている。この1821年のベートーヴェンの生活については、他の年ほどに詳しくは知られていない。ただ、秋まで病気に悩まされ、また経済的にもかなり困窮していたことは知られている。甥のカールの問題も、前年の判決でベートーヴェンの勝訴となったものの、まだ楽観はできなかった。しかも、ベートーヴェンは、もちろん完全に聴覚を失っていて、精神的にも孤独であったので、このソナタで、きわめて内省的で幻想的な態度をとり、そこにこれまでの不運と苦悩およびそれに対する闘争への追憶といったものも盛りこんだのだ。

曲は、四つの楽章からなるといえるが、その場合には、第3楽章が第4楽章への序奏ふうの役目をしていて、第4楽章に休みなくつづくということになる。そのため、この両楽章をまとめて、全部で三つの楽章からなると考えることも多い。

第1楽章 モデラート・カンタービレ・モルト・エスプレッシーヴォで、この指定のように、きわめて表情豊かで、旋律を綿々と歌わせる。追憶の感情があるともいえる。

第2楽章 アレグロ・モルトでスケルツォふうであるが、ロマン的でもある。3部形式をとり、第1部と第3部には当時の流行した歌の旋律をのべているといわれる。19世紀末の大ピアノリストのビューローによると、それはウィーンの道化芝居に由来するものだそうだが、一説ではシュレジア地方のものともいわれるものである。

第3楽章 アダージョ・マ・ノン・トロoppoの序奏は、即興ふうで叙詠ふうでもあり、同じ音をつづけて奏したりしてぐめかしく、昔のチェンバロ音楽をささ思わせる。それについて、「苦悩の歌」と記されたアリオソ・ドレンテ(悲しみの歌)の切々と迫るような旋律がくる。それが静かに消えるようになって、曲は、アレグロ・マ・ノン・トロoppoの主要部に入り、3声のフーガとなる。その頂点で、悲しみの歌の変形が示され、それからまたフーガとなる。今度は、前のフーガの主題の転回を主題としている。

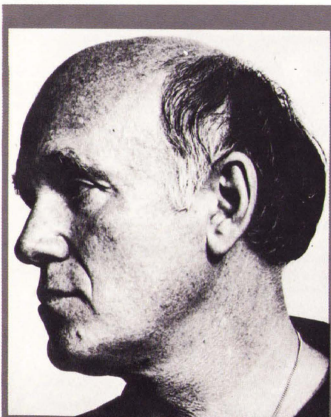
☆ソナタ 第32番 ハ短調 作品111

ベートーヴェンの一連のピアノ・ソナタの最後の作品であるこの曲は、1822年にはじめに完成された。もともと、スケッチは、1819年ごろからおこなわれていたらしい。そして、ベートーヴェンは、翌年には大曲の「ディアベリ変奏曲」を完成したものの、ピアノ・ソナタとはこれで縁を切り、「ミサ・ソレムニス」と第9交響曲を完成してから、弦楽四重奏曲の世界へと入っていったのである。

曲は、ただ二つの楽章でできているが、凝縮された手法と圧縮された内容で、高度の芸術性をたたえている。もちろんそこには、晩年のベートーヴェンの作品に共通した深遠な宗教性、人間的な高揚といったものもある。得意な対位法的な書法と変奏曲の技法を駆使し、古典的なピアノ・ソナタの世界にここで大きな精神的なクライマックスをつくりあげたのだった。

第1楽章 マエストロの序奏とアレグロ・コン・ブリオ・エダッパシオナートの主要部とからなる。序奏は、力強い大きな左手の歩みをひびかせて、荘重な気分をただよわせる。ここに不屈な精神力がかくされているのも感じることができよう。緊張力を増して主要部へ入ると、曲は、ソナタ形式に従ってすすんでゆく。

第2楽章 アダージョ・モルト・センブリーチェ・エ・カンタービレで、晩年のベートーヴェンが愛好した精神内容の深い変奏曲で、次第に浄化された世界が開かれてゆく。主題は、静穏な。しかも気品の高い旋律を歌わしている。第1変奏は、それを音型化し、主題旋律をなめらかに扱ってゆくが、第2変奏は、主題の輪廓をはやかしてきて、さらにきめ細かくなる。第3変奏は、いくらか豪快さをみせ、広い音域でピアノを活動させる。第4変奏は、その反動のように、静かな夢幻的な境地をくりひろげる。そして、これについて、主題の断片をトリルを伴って回想する間奏の部分がある。第5変奏で、主題は、はっきりと姿をみせるが、その伴奏がまた大へんに精妙なものになっている。最後の結尾は、トリルではじまり、主題の周辺をさぐるようにめぐって、静かに全曲を結ぶ。



スビャトスラフ・リヒテル

SVIATOSLAV RICHTER

1915年3月20日ウクライナのジトミルに生まれた。父親のテオフィルはウィーンで教育を受けたオルガン奏者であり、一家はオデッサに移った。父はオデッサ音楽院で教鞭をとり、息子に音楽の手ほどきをした。リヒテルは児童音楽学校にはいったがすぐやめてしまい、ドイツ語学校へ通った。しかしピアノに熱中し、独力で修得していった。15歳の時、オデッサのオペラ劇場のピアニストとなり、歌手の伴奏をつとめるうちにオペラに興味をもち、交響楽についても勉強、作曲家や指揮者になることを夢みる一方、即興的なピアノ演奏にもとりくんだ。オデッサの船員会館の音楽サークルにも加わり、1934年ショパン・プロで初めてのリサイタルをそこで開いた。そして大好評を博し、本格的に勉強するようになった。

1937年、リヒテルはピアニストになろうと決心し、モスクワに行き、有名なゲンリヒ・ネイガウス教授に演奏を聴いてもらった。そしてモスクワ国立音楽院への入学を許されその教室へはいった。

1940年4月、音楽院の小ホールでプロコフィエフのソナタ第6番をひいてモスクワでデビュー、「靡やかしい名演奏家の列に加わる新しいヒーローの出現」と評された。

1942年夏、戦時下のモスクワに、スビャトスラフ・リヒテルの最初のポスターが貼られた。戦線はモスクワのすぐ近くまで迫っていたがリヒテルはリサイ

タルを開いた。そして驚異的なテンポで活動を展開していった。抜群の記憶力によって、ひとつのコンサート・シーズン中に10から15の新しいプログラムをひさびさで登場していった。ソ連最高の音楽教師の一人、ネイガウス教授は「率直にいうと普通に使われている意味での『教える』ことはもはや何もなかった。彼に対してはいつも助言者の立場を守っていたにすぎない」とのちにのべたが、リヒテルは児童音楽学校、音楽院、そして演奏会場という普通のコースを打ちこなし、1947年優秀な成績で音楽院を卒業した。

リヒテルのレパートリーは、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、ショパン、ブラームス、リスト、サン＝サーンス、ドビュッシー、ラヴェル、チャイコフスキー、ムソルグスキー、ラマニノフ、スクリャービン、ミャスコフスキー、プロコフィエフ、ショスタコヴィチ等々へと広がっていった。

1945年リヒテルは全ソ連ピアニスト・コンクールで優勝、1950年には演奏活動の分野における優れた業績によって国家賞第一等を受けた。

この年から外国へ演奏旅行に出るようになり、1954年の「プラハの春」音楽祭では「現代のリスト」と敬賞され、中国も訪れた。ただ西欧へは出なかったため、その名声は伝説的に伝えられるのみであったが、フィンランドを皮切りに西欧各国を次々に訪れ、

「伝説はついに現実となった」と行く先々に絶賛の嵐をまきおこした。

1960年には米国を初訪問、1962年以後、フランス、オーストリア、イタリア、英国その他全世界36ヵ国以上でしばしば演奏し、そのたびに大歓迎を受けている。そしてリヒテルは「ソ連邦人民芸術家」の称号とレーニン勲章を授けられた。

リヒテルは常に世界の三十ヵ国以上から招待を受けており、1969年末からも3ヵ月にわたる北米演奏旅行をおこない、その後もイタリア、フランス等とモスクワの自宅にくつろぐひまもない程で、2〜3日おきにステージに出てピアノの前にすわっているといわれている。そうした中でも、例えば自ら会場をさがして、フランスのツール市の夏の音楽祭を創設、兼行してアルルの音楽祭にも出演するという精力ぶりである。

日本には1970年に初来日したが、その類いまれな大きく深い音楽は、日本中を感動と興奮の渦にまきこみ、絶賛を博した。

Richter's family members were all musicians. His father, on graduation of a music academy in Vienna, immigrated into the Soviet Union and settled in a small town in Ukraine, where he began to give piano and organ lessons. His mother was once one of his father's disciples. It was when his father was 42 that his only son Sviatoslav Teofilovich was born to him on March 20, 1915.

The Richters moved to Odessa the next year. Up to that time the parents had never taught music to their son. In Odessa they only let him attend a German language school. Incredible as it may sound, Richter is an independent, self-taught musician.

At 16 Sviatoslav Richter served the Odessa Opera Theater as an accompanist and at 18 he became a conductor of the same. Later he moved to Moscow. At 22 he got admission to Moscow Conservatory and was enrolled in the G. Neigaus class. It is said that Richter, who had dreamt of becoming a conductor or a composer, was made to swing to the course of a pianist under the guidance of Neigaus. Richter became personally acquainted with Gilels and Rostropovich. He also became one of the close friends of Prokofiev.

It was Neigaus who introduced Richter to Prokofiev.

This chance arrived when Neigaus asked Prokofiev to leave the premiere performance of Prokofiev's Sonata No. 6 to his young disciple Richter. Friendship between Richter and Prokofiev, which began in 1940 when they made great success in the premiere performance, lasted till 1953 when the composer died from a disease. Because of this friendship, Richter once conducted Prokofiev's "Symphonic concerto for cello and orchestra" at the time of its premiere performance in 1952 with the Soviet Union's top-ranking cellist Rostropovich playing the cello.

Richter took part in the All Soviet Union Piano Competition in 1945, having won the first prize, and in 1950 the first rank of the National Prize was bestowed upon him for his remarkable achievement in the concert activities. Furthermore, in recognition of his great contribution to the development of the art in the Soviet Union, he was awarded the honorable title of People's Artist of the U.S.S.R., as well as the Lenin Decoration.

Richter has been touring abroad since 1950, having caused a sensation wherever he played, and the visit of this greatest pianist existing is most eagerly awaited in all over the world.



オレグ・カガン (ヴァイオリン)

OLEG KAGAN, violin

オレグ・カガンは1946年ユジノ＝サハリンスクで生まれ、間もなく両親と共にリガに移り、7歳の時、ラトビア共和国音楽院付属音楽学校へ入学した。ここでヨアヒム・ブラウンに学び、音楽の専門的素養を身につけ、1953年にモスクワへ移り、モスクワ音楽院付属中央音楽学校で、有名な教育者、ボリス・クズネツォフに師事した。

1964年、第3回ジョルジ・エネスク記念国際ヴァイオリン・コンクールに参加して入賞、最初の成功をおさめたカガンは、翌1965年12月ヘルシンキで開かれたヤン・シベリウス生誕100年記念国際ヴァイオリン・コンクールでみごと第1位になり、加えてヴァイオリン協奏曲の演奏に対して特別賞も授与された。さらに半年後の1966年6月、第3回チャイコフスキー国際コンクールに参加、ヴァイオリン部門の第2位に入賞、20歳前に三つの国際コンクールで勝利をおさめ、確固とした名声を獲得した。1968年にはライプチヒで開かれたバッハ国際コンクールでも第1位となり、以来、モーツァルト、ブラームス、シベリウス、チャイコフスキー等の協奏曲や古典から現代に至る数多くのソナタをレパートリーとしソ連邦内だけでなく、諸外国で広く活躍をはじめた。その一方、師クズネツォフの没後、ダヴィッド・オイストラフに師事、さらに研鑽を積んだ。カガンは既に来日、フィンランド、ブルガリア、東ドイツ、ルーマニア、ハンガリー、ユーゴ、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、英国等の各国を訪れて称讃され、ソ連を代表する若いヴァイオリニストとして活躍しているが、スビヤトスラフ・リヒテルの推奨によって今回初来日し、協演することになった。

Oleg Kagan was born in Yuzino-Sakhalinsk, but moved with his parents to Riga, and at the age of seven entered the children's school of the Latvian Conservatory. Joachim Brann was his teacher. He gave the boy an excellent foundation in professionalism.

In 1953, Oleg moved to Moscow and entered the Central Children's School of the Moscow Conservatory, studying under the famous teacher Prof. Boris Kuznetsov.

In 1964, while still in this school, he joined the third International Enescu Violin Competition, and took fourth prize.

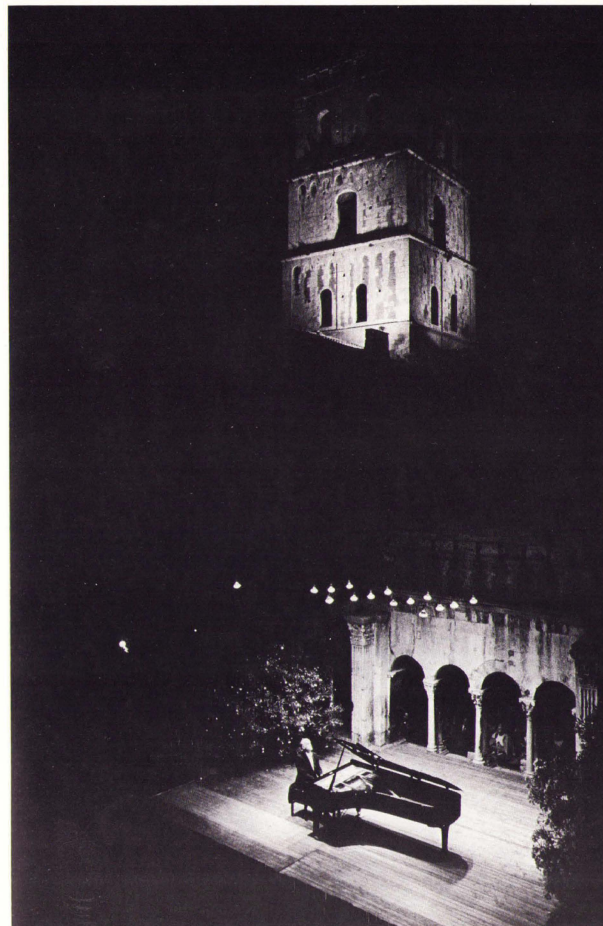
Later, while in the Moscow Conservatory, he went to a Competition in Helsinki on the centenary of Jan Sibelius. He won both the main prize and a special prize for playing Sibelius' Violin Concerto. Oleg Kagan promptly became a favourite among Finnish music-lovers.

One half year after his brilliant performance in the Sibelius Competition, Oleg Kagan fortified his popularity by taking second place in the third International Tchaikovsky Competition in Moscow. By the age of 20, he had won three major international competitions.

Oleg Kagan again won the First Prize at the III Bach International Competition in Leipzig in 1968. The critics praise the scope and variety of his artistic gift. He has been very successful extensively both in the Soviet Union and abroad: Romania, Finland, Bulgaria, Sweden, Denmark, East Germany, Norway, Yugoslavia, Great Britain, Hungary and U.S.A.

Mr. Kagan works hard to perfect his art. Since the death of his teacher Prof. Kuznetsov, he has been working under David Oistrakh. His repertoire includes concertos by Tchaikovsky, Sibelius, Brahms and Mozart, and numerous modern and classical sonatas.

右写真奥＝リヒテル(左)アル音室至1970年 (右)ツール音楽祭(1970年／(右下)バルシャイ指揮14歳と、1970年9月



リヒテルはソ連のピアニストであるには違いない。彼が成長したのはソ連国内であるし、また音楽の教育を受け、音楽家として活動を行っている場も、この国を中心としているからである。だが、人種として考えてみると、かならずしもそうではないという話を聞いている。両親は、父がドイツ系であり、母がポーランドの、かつてはその領土であった、ロシア国境に隣接していた東のはずれの土地で生まれたポーランド人だそう。しかも、そこが第二次大戦後の講和条約でソ連に割譲されたために、彼は今日ソ連人になっているのである。とはいえ、生後の生活環境や、音楽家としての教育などはソ連国内で行われたのだから、やはりソ連のピアニストであるに違いない。そのうえ、彼の演奏から発散してくる雰囲気の中にも、この国の輝かしい音楽の伝統に培われたさまざまな要素がにじみ出ているのだから、なおさらそうである。

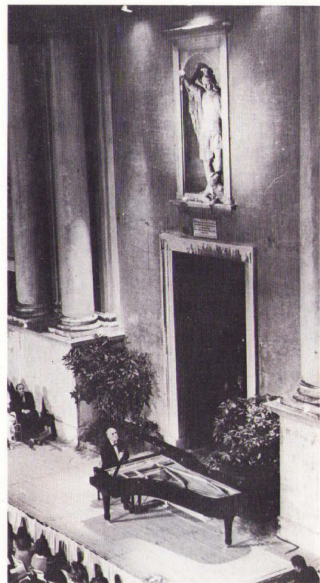
そうはいうものの、彼のピアノを聴くたびに、わたしは、戦後その国で育ち教えられた純粋のロシア系ピアニストたちから共通して窺える特徴とはいじりしく異った、何かしら彼だけに授けられている、ある特別の特質をそのうちに身に染みて感じる

ことがしばしばあるのだ。それがまた、彼がソ連唯一のピアニスト、あるいは世界のユニークなピアニストだといわれる所以なのかもしれない。そして、そのよって来たところは、彼の持つ生まれた血にあると、いえないと思う。

この前来たとき、リヒテルの姿を見るたびに、わたしはこれまでわが国を訪れたために、たまたま接触する機会があったバックハウスのことを思い出さずにいらなかった。このピアノの獅子王は典型的なドイツ民族の風貌であって、背は高いし、長い大きな顔までいとも厳肅にゲルマン風だったのである。リヒテルもこの巨人同様背高のつばだし、それに容貌までもで巨人みたいだった。とにかく、その名前の示すごとく、見たところ彼がドイツ系であるのは疑うまでもないところだろう。

さらに、リヒテルがピアニストとしてベートーヴェンを最高に得意にしていることも、またわたしの記憶からまぎまぎと浮かび上ってくる。これもバックハウスと同じだ。演奏家としてのドイツ巨匠はヴィルトゥオーソ型の部類に入るが、それでいて音楽家としては、それとは対照的に、ベートーヴェンに純粋なドイツ魂を發揮した今世紀前半最高の芸術家

だったのである。彼亡きのち、ドイツの楽聖にこれまた理想的な魂を付与したピアニストは、わたしの知るかぎり、やはりこのソ連の巨人だということになってしまう。そうすると、彼はますますバックハウスに生写しになってゆき、いつそうドイツに接近するといえなくもない。しかし、それは音楽としての内容、情感の上でバックハウスに近づいているに過ぎないのだ。彼の弾くベートーヴェンは、作品としての構成感から、その解釈、表現に当っての演奏



家としての想念の持ち方から、さらに演奏そのものにおけるピアノのテクニクまで、ドイツの巨匠とはおよそ異った立場に立った彼独自の制作をしているのである。そして、そこにドイツ民族ならざるリヒテルに内在する別のスラヴ人の顔が出てくるのだ。バックハウスのベートーヴェンは形の上ではまことに秩序井然たるものがあつた。いかに微細な箇所でも明快を欠くところが微塵もなかったのである。それでいて、ロマンの情調さえ漂わせてもいた。したがって、作品の解釈では、その進行に伴う情調の推移、変転につれて、それを制御する冷徹な論理性がその裏打ちをしていたともいえる。ところが、リヒテルのはそうだとはいえないのだ。彼はベートーヴェンに激しい直感で体当りをするのである。そのために彼は秩序ある構成感から解放されて流動し始め、それとともに、自由奔放なインスピレーションまでそのうちに躍如と発露し出すのだ。そこがリヒテルとバックハウスの音楽家としての基本的な相違である。

でも、このような直情径行の体当りにもかかわらず、リヒテルのベートーヴェンは直感、情感に極められるまま勝手に動き廻っているものではない。



鉄のごとくに凝り固まった強烈な意志のようなものがその表面に現われてくるといえよう。それは、一つには、彼の異常に激しい精神の集中力に依っているのだし、二つには、彼が体得した無双にも近い演奏の技能に依っているからである。

「何事にも不可能ということを知らぬ最高のテクニクの所有者であるに違相ないものの、あらゆる意味で、ピアノ奏法上のオーソドックスといわれるメソッドをこれほど無視して自由に振舞っているピアニストもこれまでこの世には見られないようだ。いうなれば、彼は八方破れのピアニストなのである。……まったくあらゆる手とあらゆる顔をもった現代ピアノ界の奇蹟だ。」と最初彼が来日したとき、わたしは書いたことがある。まさしくそれに違いないと今でも思っている。彼の奏法は完璧に近い。肩から腕へかけての重さが完全に指の先端にかかっているのだから、ただそこだけが正しく動けば、あとはどんなことをしても差支えないことになる。だから、彼の身体つきから、腕や手、指の格好まで、弾いているところを見ると、いわゆる教則本のそれとは違って、勝手気儘な形になっているのだ。それでは一見八方破れのテクニクと思われがちになる。だが、

その途の情道を体得すれば、それこそ宮本武蔵ではないが、どんなことをしてもよいのだ。それが名人というものであろう。絶対無二でもいわれる彼のテクニクが、ベートーヴェンはいわずもがな、その他のドイツ物はいうに及ばず、お国振りのロシア作品、それにおよそ彼は縁の遠いと思われるがフランスの印象派さえ、音楽として緊密性と集中性のきわめて強烈な完璧に近い表現にさせてしまうのである。

リヒテルにおいてはまったく不可能ということがないのだ。彼はあらゆる手とあらゆる顔をもつ現代ピアノ界の奇蹟である。



個性の強い芸術家に対しては、とくさまざまなゴシップが流れるし、常人と変わった点のみがビッグ・アップされるものである。やれ幻想のピアニストであるとか、伝説を現実にする変り者とか、ジャーナリストはこのリヒテルにもいろいろのレッテルをはって来た。かれがはじめて来日したときには、はたして演奏するかどうかまで、あなたもはれものにさわるような、超人的、奇人的取りあつかいをしたものであった。

ところが案外に人ざわりが柔らかで、田夫野人的な解放的なところがあって、演奏もこころよくしてくれたし、面白いこともよくしゃべってくれた。どこにも天才然たるところがありましたところが、むしろ親しみやすい好人物たるところが、日常生活にも赤裸々にあらわれていた。

今の世に個性を生かして仕事をしようとするれば妥協しないかぎり自己を貫きとおすことはなかなかむずかしい。自分が芸術のために純粋であろうとする行為が、世からみると変人ともとれることがすくなくないのである。リヒテルの伝説の多くもそうしたところからことさらに大きく宣伝されたものに違いない。

リヒテルの演奏を聞いていると、かれのなかに宿っているロマン的といってもよいファンタジーがたとえバッハやまたプロコフィエフのような作品の場合にもかくすにひき出されていて、このピアニストが子供のような幻想をいつも心にもって、演奏していることがよく感じられる。気がすすめば夜通しでもピアノをひくし、弟子をとったりそれを教えたりすることに非常に恐れをもっていて、コンクールの審査でもなかなか引き受けないといわれるリヒテルである。かれはピアノに自分の想像を打ち込んで、自分の気持にそうように演奏したい、それのみに徹して、また痛心しているのであろう。意心をもって…。

またかれの堂々たる体格とその大きな手とは、かれに人間の望みうる最高の技巧を可能にさせたのである。かれは自分の持てる技巧の卓越していることをひき出したくしかなかったようだ。かれがリストを非常に好んで演奏するのにもわかる気がするし、例えばチェロのロストロポーヴィチと組んでベートーヴェンのソナタを演奏した場合のリヒテルをとってみてよくわかるように、演奏技術の完全をねらって、実に竹を割ったような鋭い技巧美を展開させている。この技巧の驚くほどに卓越していること

がまたリヒテルの最も個性的な演奏の土台となっているのである。

リヒテルは型にはまった演奏のできないピアニストである。かれは同じ曲を、とくに協奏曲の場合に、指揮者やオーケストラやレコード会社を変えて幾度も演奏し録音し直している。バッハ、ブラームス、チャイコフスキー、ラフマニノフと時を変えて二、三回は演奏しているであろう。ところがそこに一つとして同じ表現のものがなくて、さまざまの変化が認められて、リヒテルが演奏の一回ごとに、かれの型をすてて新しい美の発見につとめているピアニストであることを示している。

音楽の流れが演奏において美しく盛り上げるためには、いかに数多くの後天的な経験が積まれても、その進歩は知れたもので、作品全体を流麗にしあげる力は、人間が先天的に与えられているものと考えざるをえないのである。しかもその才能は、作曲家の個性や技術によってまた左右される。わたしはリヒテルの演奏するショパン、例えばバラードを聞いていると、技巧の上からはなっとくできても、リヒテルがその音楽に乗りきっていない、細かに変化するショパンの感覚をじゅうぶんにとらえるフランス風



といつてよい洗練された感受力をゆたかに身に付けているとはいえない演奏が多い。どこかに機械のようにシャープで正確な、いわゆるメカニズムといふべき技巧であらわしきれないで、ショパンの演奏からすれば野暮くさいところさえあらわれてしまっているのである。

こうした感受の傾向は、個性の強い芸術家にはとくに厳しく作用して、リヒテルの場合、例えば同じドイツ音楽をとっても、かれが演奏するシューベルトやシューマンとバッハやモーツァルトとはかなりの相違が認められる。リヒテルのバッハは、かれの身中のロマンティズムをおおいやすことができないで、協奏曲一つとってみても、かなりゆくりとしたテンポで、じっくりと歌い込んでゆくスタイルの演奏である。ときに緊張した気迫のこもった進行にもなるが、総体的に奥床しく柔らかに歌って幻想をゆたかに示そうとしている。それがかれのバ

ッハをかきりなく美しいものに感じさせるのではあるが……。聞くところによるとリヒテルの血にはドイツ人の血が濃く流れているということである。かれがロシア人の激しさと粘り強さと重さをもっている音楽家であるとともに、そこにドイツのロマン的精神をいつもあらわさないではいられないのはそのためであろう。

リヒテルのベートーヴェンがそうである。「熱情ソナタ」一つとっても、ベートーヴェンにプラス、リヒテルが非常に強く示されていて、むしろリヒテルの「熱情」といってもよい個性的なベートーヴェンの演奏となっている。それがまたかれのみごとな筆跡によって、のびのびとかつすばらしい校訂を發揮させて書かれているので、大きな魅力となっているのであるが……。

しかしリヒテルが最も自由に自己の感受性と音楽性とを解放して表現できるのは、自国のロシアの作

品の場合である。自国語で話す親しみやすさといえよう。かれはロシア人の感覚をそのままに生かして、人間味のある演奏をくりひろげる。グラズノフやプロコフィエフ、またチャイコフスキーやムソルグスキー、それからくに注意しないラフマニノフとスクリアピンなど、リヒテルがなんの抵抗もくなくあてて正直に自身のピアノのすべてをさらけ出して、しかも作品の音楽的めくりをみごとににつけた演奏ばかりをしている。リヒテルがそのつと自分に感じるものをあらわそうとしての演奏であることには変りがないが、その筆跡がそのままに作品の性格とくっ合って、それでなければあらわせない表現となっているのである。これはリヒテルが先天的にもっているものがあるからできたことで、外面から説明したりまた抽出させたりすることは不可能である。

リヒテルにはすぐれた技巧から来る音の鮮明な美しさがある。しかしそれよりはこのピアニストがもつドイツ・ロシア系のやや野暮にも思われるようなロマン的精神のゆたかなあらわれが、リヒテルの他には求められない個性である。またそれを自由に打ち出せる作品におけるリヒテルが、まったくユニークなピアノの存在となるのである。



大阪港で歓迎の花束を受けしリヒテル夫妻

ロシアのピアノ演奏の伝統をつくるのに大きな貢献をしたのは、チャイコフスキーと同時代のルービンシュタイン兄弟であった。この兄弟は、ともに巨匠的なピアニストであって、とくに兄のアントンは、ヨーロッパ各地を演奏旅行し、3時間以上におよぶ巨大なプログラムで精力的な演奏会を開いていたのである。これだけで聴衆はおどろくに十分だったが、しかもその演奏は、リストを思わせるもので、力と情熱にみちていた。弟のニコライも、すばらしいピアニストで、いついかなる場合でも、高い演奏水準を落すようなことは決してしなかったという。この兄弟がロシアのピアノ界におよぼした影響力は、大へんに強かった。しかし、この2人でさえ、必ずしも理想的なピアニストではなかったのである。たとえば、アントンは、デリケートな演奏というのが不足していたといわれている。アントン自身もそれを自覚していて、プログラムには、巨匠性を誇示する作品や技巧や量感に重点をおく作品がもろこまっていた。そして、アントンは、自分の演奏会に金を払ってきにくる人は、デリケートな味を期待す

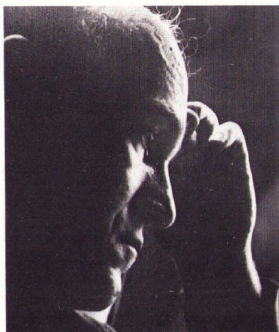
るのではなく、巨匠的な技巧をあてにくるのだとさえ思っていたのである。

こうした演奏様式の結果、つづくロシアのピアニストでは、ごく自然に巨匠性がことのほか重視されることになった。そして、その傾向は、現代にいたるまで、ある程度つづいていて、いわゆるロシア=ソビエトのピアノ演奏の伝統を形成する大きな要因になった。しかし、こうした伝統だけが尊重されたわけではなく、とくに西ヨーロッパで活躍する演奏家や西ヨーロッパ的な教養を豊かに身につけたピアニストは、故国に新風を吹きこむことになった。スクリャービンやラフマニノフは、その代表的な人でもあった。アントン・ルービンシュタインの様式に、デリケートな表現が加わってきたわけだが、それは、現在から見れば、後期ロマン主義的な、かなり主情性の濃いものだった。それに加えて、帝政ロシア時代には、ピアニストや指揮者をはじめとして、西欧から多くの演奏家が入ってきて、やはり無視できない影響をあたえた。このままですれば、ロシアのピアノの演奏様式も、西欧と同化したものとして、歩

みをつけることになっただろう。

ところが、そこにソビエト革命がおこった。それに伴って、ソ連から亡命した演奏家もいた。ラフマニノフやプロコフィエフも、ソビエトを去った。そして、ソビエトの文化は、鎖国に近い状態におかれた。第2次大戦終了後ほどなくして、ソビエトの文化攻勢がはじまり、演奏家も自由主義社会で演奏するようになり、ソビエトのこれまででは閉ざされていたピアノ界のことも次第に明るみにでてきたのである。

ソビエトは、なにしろ広大な国である。砂漠地帯があるかと思うと、いつも氷が張りつめているところがある。たんに南北にひろがっているだけでなく、東西にも長い国である。それだけに、いろいろなタイプの演奏家が出てくることは十分にありうる。ピアニストでいえば、戦後の日本が直接に知ったソビエトのピアニストは、1909年生まれのリフ・オボーリンだった。このオボーリンの演奏は、その当時は、日本でもかなり話題を呼んだようである。しかし、その後の時期にソビエトのピアニストの演奏に接し



てみると、どうもオボーリンは、いわゆる保守派にぞくする最後のピアニストのような人だった。その後の世代のピアニストとは、オボーリンは、完全に違っていた。このオボーリンでは、ロシアのピアノ界の伝統ともいえる後期ロマン主義的な主情主義が目立っていたのである。

オボーリンとそれにつづく世代との間には、モスクワやレニングラードの音楽院などで、どのような教授法の変化があったのかは知らない。しかし、現実にギリリスにしろ、リヒテルにしろ、新しい時代のピアニストになっていた。ただ、そこに、ルービンシュタイン以来、当然のこのようになっている技師の技巧がある。

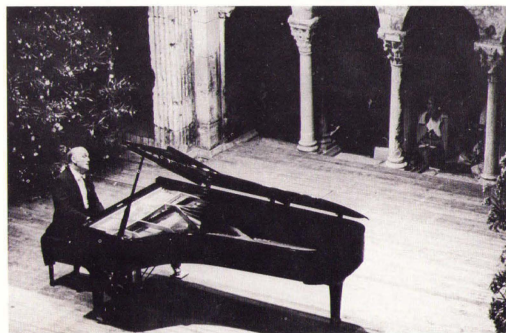
ソビエトは、音楽の方面では、とにかくコンクールの成績を重視する国となった。その結果、並み大抵の技巧をそなえただけでは、演奏家としては世にでられない。それをさらに上廻るような技巧が要求されている。だから、なかには、技巧だけにかなたよってしまっ、音楽的には少しも面白くない演奏家が出てくることもある。しかし、そうした技巧にさら

に音楽的な味を加えた大器の演奏家が出てきていることも事実である。リヒテルも、その1人ということができる。

リヒテルについていえば、その演奏には、主情的にふめられたところがなく、楽譜から納得させる音楽がある。しかし、楽譜に記された音符のように冷たいのではなく、そこに生命力があたえられているのである。リヒテルがこのような演奏をできるということは、ずばぬけたテクニックをもっているからである。その一つ一つのピアノの音は、美しく磨きぬかれているかのようであり、他の音のひびきとぶつかり合って濁ることもなく、澄んでいて明快である。しかも、リヒテルは、いろいろな部分でピアノニッシモの美しさをだすことを忘れず、フォルティッシモでも整然さを失うことがない。その演奏をきいていると、得えないあざやかさ、歯切れのよさに唖然ときせられるのである。そして、リヒテルがドイツ=オーストリア系の作品、とくにロマン派の作品を得意とし、そこに熟のこもった詩情をおくというのも、周知の事実である。しかも、この詩情は、洗練され

たものであり、作品にふさわしいものでもある。こうした詩情も、ソビエトのピアノ演奏の伝統からみれば、劇的なことであろう。リヒテルの父がドイツ系のポーランド人であり、ウィーンの音楽アカデミーで教育を受けた人だということから、そのような詩情も、ごく自然に身についていたといえるかもしれない。

大体に、リヒテルは、そうした詩情を小さな世界で生かすようなのが好きなようである。たとえば、変奏曲のような作品や小品や、小品曲集を好んでいる。前回の来日の際のプログラムも、そのような傾向をみせていて、ベートーヴェンの変奏曲だけで組まれていたことがあった。個々の変奏や小品で、それに応じた詩情を集中して引きだすことは、リヒテルがドイツ=ロマン派の作品を好むこととも共通している。いわゆる派手な効果を狙わずに、小さな世界の味の濃い芸術品をつくるということも、ソビエトのピアノ演奏の伝統に新しい歩みを刻むことになったのである。



舞台の上のスヴィアトスラフ・リヒテルを見てみると「ピアノの巨人」という感じがびびった。巨人という、大磐石のように大きくて堅固、何事にも動じない強さと思いがちだが、巨人族は意外に繊細であり、内攻的であるらしい。何年か前、名古屋のホテルで按摩さんをつたひ、やって来た大柄でなかなか器量よい、健康優良児がそのまま成長したような娘さん。馬鹿に力持ちで強烈にきくので、弱音をはくのも業腹と、からかい半端に「すごい力だね、プロ・レスの選手にでもこれなら通じらるだろ」と云うと、「ええ、お客さんの次はジャイアント馬場をもむんです。お客さんとは別の手馴らした程度よ」と、すましたもの。「G、馬場なんてこわいだろ」——「いいえ、とても大人しい、優しい方です。もんでる間、何時も何か本を読んでいるです。静かな人……」何かと退屈しのぎに話しかけると、馬場さん、ここに泊ると必ず私をよんでくれるです。他の子じや力不足で通じないらしいんです」と問わず強引に話しかけるのである。「大きな人って、案外デリケートなんですね」——「じゃあ君はどう」——「あはは、いやあ、あなたは別です。大まかだから、万事ににつけて……」そんな無駄話が何故か記憶に残って、でぶでぶのほくほくは、巨人型の人を見る時、いつもあの按摩の娘さんの言葉を思い出するのである。

リヒテルを初めて見た時もそうだった。ニューヨークの美術館が何かのオーデトリウムだったが、大きなコンサート・グラウンドが小型に見える程の大男のピアニストの顔に、びびりと神経質な、デリケートな感じを抱えて意外だった。あの按摩の娘さんの言葉を、実はこの時にも思い出していたのである。

不可能と思われていた来日が70年9月に実現して、*幻が幻でなくなった。だが、9月の日本は気候が

不順で、湿度の高い不愉快な日が続き、音楽会場を蒸し暑い空気で重ったるものにする事が多かった。稀代の気難し屋と伝えられていたリヒテルはしかし、噂とは逆に実によく頑張って日本の聴衆の期待に答えていた。しかし、惜しい事に途中病床に倒れ、「あゝ、矢張り……」と失望されたが、回復してから、再び待ちわびていた聴衆の前に姿を現し、見事な演奏をきかせてくれた。正直に言うところ、この一連の演奏会をきく何回かきく事できた私は、それでもまだ矢張りニューヨークのコンサートの方が良かったように思われた。ある人はこの不調を楽器のせいにした。他のある人は健康状態を案じながらそのせいだと割り切っていた。また、日本の気候に理由を求める人もいた。私はそのすべてが関係しているように感じていた。そして絶好調のリヒテルを、狂おしいほどの日本のリヒテル・ファンにきいてもらいたいと、熱烈なファンの一入として、心ひそかに願っていた。勿論、不調とはいえ、流石は巨匠、他人には真似出来ない個性的表現と、鋭い技の研ぎを露す瞬間はしばしばあった。ただ、何か集中しにくそうな、持続性に不足した、リヒテルしからざる瞬間も時にはあったようだ。もう日本はこりごりだ——などと思われてはかなわない。そう案じていた私だが、その心配が杞憂であった事を今度の来日で知って、一安心しながら、今、筆を進めているのである。

作曲家だから、というのだろうか。私は「作曲家として、リヒテルの演奏に思うこと」というタイトルで書け、という。まともに答れば、あんなに神経の行とどいた、技の研ぎえ演奏家にひいてもらえたら、作曲家冥利につきますでしょう、とでもいう他はない。その意味では、リヒテルが最も得意とするプロコフィエフに羨望の念をきんじえない。例えば「ピアノ協奏曲 第1番」あれをひいたレコードは他にもある。例えばジョン・ブラウニングだったか、アメリカの若手の逸材の演奏が、馬鹿に重く、ひき

ずるようなリズムで量感の強調に終始しているのに反し、リヒテルのはまるで反対に軽ろやかに歯切れよく、モダンニスト・プロコフィエフの若き日の姿を、軽妙親昵なタッチで見事に再現して見せてくれている。ブラウニングの解釈できいただけなら、もしかすると私はこの曲を駄作と判じ「何たって音楽学生の習作なんだから……」と、気にも止めないかもしれない。しかし、リヒテルのできたものでは、プロコフィエフの強烈なオリジナリティと、稀有な音楽性、そして高度な技術的洗練に、文句なく目を見はらざるを得ない。そして、この瞬間に、この曲は私の好きな作品のリストに加わってしまうのだ。演奏とはそんなものだ。だから、作曲家はこわがるのだ。作品の生殺与奪の権は演奏家にある。特に現代曲の場合には……。プロコフィエフについていえば、リヒテルの演奏できくと、あまり知られていない「第5」や「第2」のピアノ協奏曲が滅法面白い。ホロビッツがスクリアピンを復活させたように、リヒテルはプロコフィエフを不滅のものとして残すに違いない。

最後に一言。リヒテルの鋭さ、激しさ、超絶技巧の研ぎ、ダイナミズムといった面を見るのにプロコフィエフは恰好の場を提供するだろう。だが、その反面にある優しさ、デリカシー、旋律性、浪漫性、ナイヴな音楽性が最もよくあらわされるのがシェーベルトなのである。シェーベルトのソナタを好んで弾くソ連の傑出したピアニストたちの中で、リヒテルのはまたひときわ抜きでいると思うのだが……。老いていくこの巨人の未来に私が期待するものは、日本ではまだ敬遠されがちなシェーベルトのピアノ・ソナタに、モーツァルトに、モーツァルトのポジションを与えてくれる事なのである。

(作曲家)

ヨーロッパ四大音楽祭めぐり

昭和49年8月11日(日)
—8月30日(金)17:20日間

また音楽祭のシーズンがやって来ます。クラシック・ファンにとって、ヨーロッパの音楽祭は一度はぜひ行って見たいもののひとつです。今年こそは思いきってお出かけになってはいかがでしょう。

従来のように音楽祭をいくつも駆けめぐる旅行ではなく、パイロイト、ザルツブルク、ルツェルン・プレントツにしばらく、それらのプログラムを重視し、一つ一つの音楽祭を、じっくり腰を落ちつけ

て鑑賞し、楽しんでいただき、さらにウィーンでのオペレッタやコンサート、パリ、ローマなどの観光も組合せ、バリエーティに富んだ企画です。内容をご覧の上、お早目にお申込み下さい。

旅行日程

東京→(アムステルダム経由)パリ(3泊)→ニュールンベルク→パイロイト(2泊)→プレントツ(1泊)→ルツェルン(2泊)→チューリッヒ→ローマ(2泊)→ウィーン(2泊)→ザルツブルク(4泊)→ミュンヘン(1泊)→フランクフルト→(南回り)東京

【募集人員】 35名(定員になり次第締切)

【旅行費用】 ¥535,000

(この費用には航空運賃・バス料金・ホテル料金1日2回の食事料金・ホータレッジ・団体行動中のチップ等を含みますが、個人の費用および音楽会等の入場料は含まれません)

※ 頭金10% 最高24か月の分割払いのできるローンも利用できます。
※ 詳細はパンフレット・申込書をお送りしますので、下記までご連絡下さい。

*NAAコンサート・メンバーA会員の方は、特典がありますのでお申し添え下さい。

お申込み・お問合せ

〒105 東京都港区芝罘平町35

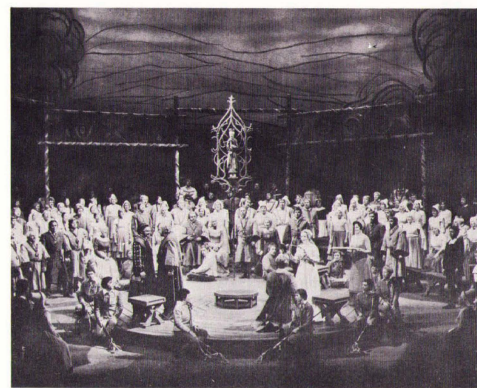
船橋振興ビル

(株)日本交通公社

海外旅行部門支店

担当：井内貴明・小椋和男

電話(03)504-1711



パイロイト音楽祭の「ニュールンベルクのマイスター・シンガー」第2幕

○各音楽祭の主な演奏プログラム○

【BAYREUTH】

パイロイト音楽祭(8月15・16日)

楽劇「トリスタンとイゾルデ」

(本年より新演出)

指揮：G・クワイバー 演出：A・エバーディンク

楽劇「ニュールンベルクのマイスター・シンガー」

指揮：S・ヴァルヴィツ 演出：W・ワグナー

【SALZBURG】

ザルツブルク音楽祭

歌劇「フィガロの結婚」モーツァルト(8月24日)

指揮：H・V・カラヤン 演出：J・P・ボンネル

指揮：H・V・カラヤン 演出：J・P・ボンネル

指揮：H・V・カラヤン 演出：J・P・ボンネル

指揮：H・V・カラヤン 演出：J・P・ボンネル

指揮：H・V・カラヤン 演出：J・P・ボンネル

指揮：H・V・カラヤン 演出：J・P・ボンネル

指揮：H・V・カラヤン 演出：J・P・ボンネル

指揮：H・V・カラヤン 演出：J・P・ボンネル

指揮：H・V・カラヤン 演出：J・P・ボンネル

指揮：H・V・カラヤン 演出：J・P・ボンネル

指揮：H・V・カラヤン 演出：J・P・ボンネル

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(8月25日)

指揮：カール・ベーム ピアノ：リヒテル

モーツァルト「ピアノ協奏曲第11番 K.450」

ブルックナー「交響曲第7番」

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

指揮：H・V・カラヤン (8月27日)

モーツァルト「ディヴェルティメント」K.334

シュタウアー「交響曲第10番作品93」

エディット・マティス/ブリギット・ファ

スベンダー/ペーター・シュライヤー/

ウルター・ベリール(重唱の夕)(8月25日)

(ピアノ)のルンホルツ・エリッヒ・ウェル

シューマン「スペイン組曲」作品74

ブラームス「交響曲第1番」作品52

(その他ウィーン・フィル管楽器アンサンブル、

モーツァルト管弦楽団、ホフマン・スターツの

歌「エーデルマン」等があります)

BRIENZ

プレントツ湖上音楽祭(8月17日)

指揮：「カール・ベーム」

指揮：A・グッダグラー 演出：N・メーリル

ウィーン交響楽団、ウィーン国立歌劇場合唱団、

プレントツ湖合唱団

【入場券】パイロイト、ザルツブルクの主

な入場券は相当数確保しております。

リヒテル氏との協演の思い出 ■小林 仁■

同じ演奏家でも、ステージから受ける印象と、レコードから受ける印象とが全くちがうことはよくあるのだが、リヒテル氏の演奏もレコード（コンサートの実況録音ではなく）と実演とはかなりちがったものだ。もちろん、これは意識してわざとちがえているのではなく、演奏家がその置かれた環境によって自然にちがった音楽が、結果として出てしまうものである。それから演奏家として、と云ってよいかどうかは分らないけれども、公開の席ではない、たとえば自家のごく少人数の親しい人たちの間で演奏する場合も、これまた別なふんい気をもっているために演奏会とはちがった演奏があっても当然であろう。

1970年に、リヒテル氏が初来日した折、コンチェルトの演奏会のための下準備として、指揮者との打ち合わせのために、ベートーヴェンの第3コンチェルトと、モーツァルトのコンチェルト2曲、計3曲

の第2ピアノを弾くように、との依頼が私のもとに舞いこんだ。リヒテル氏の演奏を自宅で間近に聴くことができる！というまたと得がたい話に、あときのこととも考えずに即座に承諾の返事をしてしまったものである。

しかし、落ち着いてよく話を聞いてみると、何とそれは二日後ということであり、おまけに私自身その当日、仙台で講演の予定があって、どんなに急いで東京に戻っても夜8時半になってしまう計算だった。どんな理由であれ、引き受けた仕事を二日前になってキャンセルすることは許されないから、これは折角だけれどもあきらめざるを得ないかと親念してその旨をお伝えした。ところが再度電話があって、リヒテル氏は夜の9時、場合によっては9時半に練習を開始してもさしつかえないという意向である、という返事もどって来た。

それならば、全くきついスケジュールだが、何と

かやれそう。そうすると次の問題は仙台→東京の足。秋のシーズンで飛行機は勿論とくに満席。しかし、こうなったら、スチュワデスにおいてもらってでも、東京へ8時すぎに着ける飛行機に何としてでものらなくてはならない。これもマネージャーの奔走のおかげで、どういうルートによるものか知らないが、なんとか席がとれた。

それでもまだこれで問題が全部解決したわけではない。コンチェルト3曲のうちの2曲は、自分のレパートリーとして、或いはよく勉強した曲として、オーケストラの隅々の部分まで知っていたから全く準備なしででも、どんな相手であろうと何とかなわされる自信はあった。しかし、残る一曲については、私には初めての曲で、楽譜のもち合わせえない。これには弱ったが仕方がないから人に頼んで楽譜をとどけてもらい、仙台へ出発するまで一時間たらずの間、ピアノに向って、とくに難かしそうとな



ころだけざっと目を通し、残りは乗物の中で勉強することにした。もとより、私はギーズキングのような天才ではないから、乗物の中で楽譜を眺めただけで暗譜で演奏するなどという難れわざはできるおけない。しかし、なにもギーズキングほどの大天才ではなくても、コンチェルトの第2ピアノくらいのこと、初見にも毛のはえた程度のこと、どうにかなるものである。

ともかく、このようなごたごたのあったあと、当日約9時のとき通りにホテル・オータニのリヒテル氏の部屋をノックした。静かな物腰であられたリヒテル氏は、大ビアニストという威圧感を全く感じさせない温厚な紳士で、淡いセピア色の背広を上品に着こなしている。これまで私が接した超一級の芸術家から共通して受けた印象は、会った瞬間から別れるまでの間、人をひきつけて離さないある独特な人間の魅力をもって、しかもそれは人に威圧

感を与えたり、ものおじさせたりするようなものではなく、ということである。

部屋にはスタインウェイとヤマハのコンサートグランドが一台ずつやや離して置いてあり、リヒテル氏は私にスタインウェイの方で弾くように、と云い氏自身はヤマハの前に腰をおろした。指揮者のルドルフ・バルシャイ氏はピアノの上にスコアを広げて待っている。弾きは始める前にベートーヴェンの3番のテンポについて、リヒテル氏は「私は少しおそいテンポで弾くから」とトゥッティのテンポを私に暗示したのみで、それ以外最後まで一言も何も言わなかった。つまり云う必要もなかったのである。私はリヒテル氏の音楽のゆとりといた流れたにた乗っかっていさえすればよかったのだ。ステージの上やレコードから受けるある種の神鋒の張りつめたようなところは、ここでは全然感じられず、一言一音を暖かい毛布で包みこむような、それでいてはしな

い太洋を見渡すような壮大な音楽に私は自分が一緒に弾いていることすら忘れてただひたすら聴き入っていた。

3曲のコンチェルトを全部通して2回、普通ならそれだけでもとくなくたにるところだが、私は全く疲労を感じなかった。終わってからリヒテル氏は私に、「どうも有難う。おかげで練習がとてもよくなかどって大助かりしました。」と云い、私も「すばらしい音楽を有難うございました。明日の演奏会の御成功を祈ります。」と挨拶を返して別れた。ホテルのフロントの時計はすでに午前零時をとうに過ぎていた。

（ビアニスト）

第六回 ザルツブルグ モーツァルトウム音楽院 夏期国際セミナー

この講座は毎夏モーツァルトの生地ザルツブルグで開催される有名な「ザルツブルグ音楽祭」の一環として開設されているもので、既に50年の歴史を持っています。講座はその密度の高い講義とあわせて評価が高いばかりでなく、国際的に著名な教授の親しい指導を受けられる事で広く知られています。

滞 欧 期 間：昭和49年7月25日～8月29日……36日間
受 講 期 間：昭和49年8月5日～8月24日……25日間

参 加 費 用：580,000円 申込受付人員：35名 限定

開 講 科 目：指揮、オーケストラ、オペラ、ピアノ、
ヴァイオリン、チェロ、室内楽、声楽、
フルート、ホルン、クラリネット、ファゴット

第二回 国立ワルシャワ高等音楽院夏期講習会

この「ワルシャワ・ショパン講座」はポーランド文化芸術省、国立ワルシャワ高等音楽院、ポーランド演奏家連盟、対外文化交流局のご好意を得て、私達のために特に設けられた夏期講座です。ショパンの国、ポーランドでの音楽研修に皆様方も御参加下さい。

滞 欧 期 間：昭和49年7月25日～8月29日……36日間
受 講 期 間：昭和49年7月27日～8月10日……14日間
参 加 費 用：880,000円 受 講 科 目：ピアノ
申込受付人員：受講生15名限定 オブザーバー5名限定



ヨーロッパ大学

お問い合わせは下記まで

ヨーロッパ大学音楽院研修部

大阪市北区曽根崎新地2丁目42 白楽ビル401号(〒530)

電話 大阪(06)345-3509(代表)までお申込下さい。

●利用航空会社：エフトハンザ・ドイツ航空会社
その他 IATA 加盟航空会社

取扱い旅行代理店

通称大阪国際旅行業 代理店第1338号

株式会社 ワールドエクスプレス

1970年の8月31日午後、駆けつけた大阪港に間に合わなかった私は、Gホテルに飛び込んだ。「あつ、ちよつと」と制止する係の声など耳に入らばこそ！すでに「テルコ！」とドルリアク先生（夫人）の呼び声がドアの後ろから聞こえていた。とびついて、「やせた」とか「太った」とか「元気？」とかいっている間にリヒテルも傍に来て、出むかえにおくれた理由に何か生徒の事でいいわけをする私に「おや、いつからテルコはプロフェッサー？」とおどけてキッスをして下さる。おじさまらしく、こうしてお相手して下さる時もある彼なのである。

お二人になって、豊富な日本の果物を食べ、シャワーをつかい、休息し、隣のピアノ室で何時間かさらい、出て来た時、夜の早い大阪では、すでに店などは閉店の時間になっていた。想像もつかない彼は街に出て食事がしたいという。大童で、しかしここが腕の見せ所と手配をするマネージャー氏。大阪梅田の駅の東側（？）で閉店まぎわのピフテキ屋にすべり込んだ。盛り場とはいへ道筋には、もう赤ちやうちんがちらほらしているだけだ。「必ず、もう一度

往回ここにやって来るよ。とても面白い！」と満足そうなりヒテル。——勿論翌日のおひらはまたその街へ行き、水槽に魚の泳いでいる大きな和食堂（大衆的な）の小座敷で、おさしみやら焼鳥に舌づつみをつたわけてある。

それから毎日、さらう事、さらう事。ロシア式に2時か3時の昼食前に5時間さらって、お昼寝をしてまた夕方4時間——という日々だった。

そしてピアノえらびの日が来た。フェスティバル・ホールのステージには高々とふたをあげたグランドピアノが八台並べられていた。そうと聞いていた私達ささやかしとする壮観だった。スタンウェイが二台、ベヒシュタインが一台、ウェーゼンドルフアーが一台、ヤマハが四台……（？）……。

見た途端に、来日以来の晴天はかきもった。他人にガタるには自尊心のありすぎて、悲しそうな目をしてただただ夫人に訴えるリヒテル。

こんな事に取り組まなくてはならないとは！まだまだホテルにかえって、さらいたいのに！と地だんたをふみたそう。また、自分のためにこんな大さうな事をさせたという事が彼にははづかし、いとわしい。どのピアノが真によりよく彼の演奏を表現出来るかを本気でしらべ出したら相当いらいる仕事だ。「ちよつとさわるだけ、さわってごらんさないよ。私達も聞いていますから」となだめる夫人。結局は第一日はスタンウェイ（？）、以後はヤマハになったが、この日、「そのピアノはフォルテがきたないようよ」等という私達に「いなどうでもいい。常に大切なのはpなんだ」とつぶやいていた。この日からしばらくは人嫌いになって皆にお冠りきみであって、夫人は「昼食もピアノ室へ持って行って一人にしてある」と肩をすくめていられた。

この日は、私の誤した「リヒテル」の本が出たが「誰の本だ」と鋭くたずねられた。「デリソンは自分に会わずに本を書いた」「自分はあの本には反対している」といわれ、ラビノーウィチののだという。「それならいい。今度ミルシエンのがモスクワで出るが、それも読みさない」との事。「何かの機会に」「リヒテル自身はデリソンの評論に反対である」という事を発表してはいい」と云いつかつたので、今、こ

こに記しておく事にする。

レコードにも問題があった。彼の賛成を持たずに外国の音楽会場で録音によるレコードが沢山売りに出されていると怒っている。「ソヴェト側の同意を得てある」とレコード会社というところの機嫌も、又当のレコード会社も自分の意見は聞いて来ていない」との事。著作権の問題であり、彼の同意を得べく当然関係者は努力しなくてはならない事だろう。あまりにも長年、また平然と彼の権利が無視されているので、当人も黙認しているかのように私まで思っていたので、ちよつとハッとした。すばらしいすばらしいといわれている沢山のレコード、又「リヒテルは多少のキズはあっても演奏会場で録音をレコード化するのを好んでいる」と等といわれているレコードも、決して彼自身の芸術上の意図に従って出されているのではないとしたら、我々もあちこちで思いちがいをしている事になる。彼は現実にはこれ等の事と、自分自身の演奏家としての声望と権威だけで開かなくてはならないので（ソヴェトで弁護士をやとって次々と訴訟をおこす等聞いた事がない）、

約束を破ってレコード会社に録音を使用させたマネージャーとか、彼の考えを尊重せずにフェアでない事をした団体とか都市とかには、再び演奏に行かない等の事で罰するしかないという面もあるのだろうか。残念な事である。

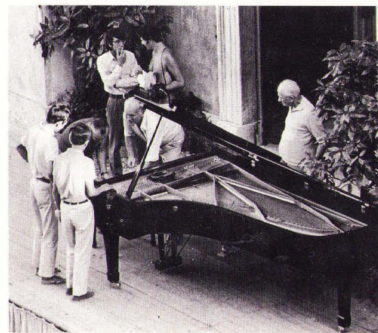
はじめてホテルのレストランに下りて行った日、やはり気づく人は多くて、3、4人席を立ててサインを求めに来た。さつと飛んで来てそれをささ切り、ふり切ろうとする人を羽がじめにしてつれ出す係員。どこに行っても人に取り囲まれたりサインを求められたりして、自由に出来なくなるのを彼がとても嫌っている事が、サービスのよい日本側についていたのだらう。しかし彼は顔をゆがめ制止する。「テルコあの人に「サインするから」と云って来て」「何も力づくでとめなくても……」しかしマネージャー氏は「そういう風になると、次から押し寄せる人を我々がとめる時の口実がなくなってしまいます！」と抗議している。勿論そういう時止めてもらわなくてはならない。——が、彼は何事も非人間的だったり（気がいいとみえ愛好者とか）不自然だ

たり（官僚的なやり方で人をつまみ出したり）するのほどもいやなのだ。——それは当然の事だ！たのむのもこたわるのも良識を持って、時には親しみ深くチャーミングに人間同志やり合いたい——にちがいない。

彼は演奏会の後、かえり道にとても陽気な時もある。東京で病後に行なったムソルグスキーの「展覧会の絵」とシューマンの日のけり、ニーナ夫人と私に手ぶりもさせて絵の説明をしている。「テルコ、キエフの鐘がきこえた？」「え……ええ」「大鐘だから、ゴーン ゴーン というのが鐘ですよ」「あつそうだ、小さな鐘や日本の鐘とはちがうんだ」「モスクワで聞いた事ない？ 教会の側で」「うん、シューマンのこれは本当に美しいねえ……」……開放感にあふれて音楽の話を決かたえとしていた。

瀬戸物の好きな彼、仁王様のまねをして見せる彼、八ツ橋と銀杏と柿の種を好きになった彼……そのすべてを描くには紙数の少いのが残念である。

(音楽家)



1970年秋、スウィートライフ・リヒテル氏はじめで日本を訪れたとき、この稀有のピアニストのことはお気に召したもののひとつに新幹線があった。

9月6日、大阪での演奏を好評のうちに終わったリヒテル氏は、愛妻ニーナ・ドルリアック女史と二人、ひかり号のグリーン車のなかほどに座を占めた。鉄道関係の人たちの「山側」とよぶ、進行方向にむかって左側の座席である。そして東京までの三時間余、車窓に移りかわる風景に飽かず見入った。「快適じゃないか」と、顔をほころばせる。それはステージでの自然した、きびしい表情からは想像もつかない、人なつこい笑顔であった。

「そうでしょう、私は現実の人間ですよ。ここにこうしているじゃありませんか。古い「神話」は信じられるけれど、新しい「神話」は信用できない……。」むしろ悪戯っぽいといった語調で、そう言った。

だが、それはここまできてはじめてわかったことである。それまで、このピアニストはど数多くの「神話」によって飾られていた音楽家はいなかったのである。日本への演奏旅行についても、以前から何回も実現がうわされ、そのつどふしぎと立ち消えになってしまった。それがEXPO'70を機会に、ようやく実現することになったのだが、それもこれまで熱心に招待を働きかけたいくつかの団体が合同で主催、あるいは協賛に名をつらねるといって、かつてない大袈裟ななたちをとるようになった。

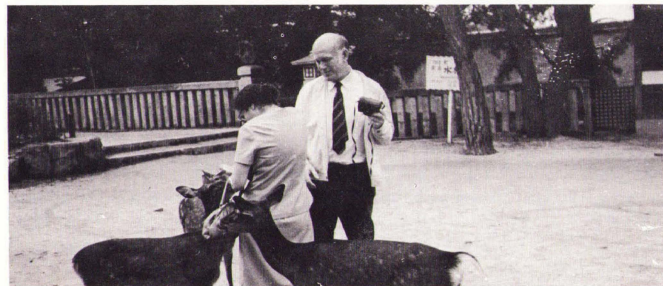
これは1950年、リヒテル氏が初めて西ヨーロッパに演奏旅行したおりの状況を思い浮かべさせる。このとき、ドイツ・グラモフォン、EMIという二つの大レーベルが争奪にしのぎを削り、結局は合同で録音、その取権を二つに分けた。

そうしたリヒテル氏に「神話」が生まれないわけではない。そして、このときも、いかにもリヒテル氏らしい現われ方をした。モスクワからシベリアを汽車で横断し、ナホトカから船に乗りついで大阪に上

陸した。1973年、エフゲニ・ムラヴィンスキー氏が同じコースをたどったから、いまではそれほど奇異には感じられないのだが、そのときはまさに異例のこととして大いに話題をにぎわしたのである。

だからこそリヒテル氏の「ここにこうしているじゃありませんか」になったのだが、そのあと、さらに言葉をついで、こう言った。「日本には以前から来たいと思っていた。遠いと思うか？もちろん、そう思うよ、なにしろシベリアを汽車で走って来たのだから……だが、こうして実際に来てみると、もう遠いとは思えない。日本の聴衆は音楽をよく理解しているようだし、私の演奏を熱心に聴いてくれた。大阪での演奏は、自分でも満足できるものだった。」

だが、その「満足できる演奏」にこぎつけるまでの努力は、はたからみただけでも大変である。一日の練習量は「絶対に5時間以上」とはっきり語ったが、リサイタルの前日には10時間近くピアノにむかっていたという。その前年、モスクワを訪れたおり、リヒテル氏の住むという建物の傍を通ったのだが、そのとき案内に立ってくれた人から、「ときには徹夜でピアノを鳴らすこともあるそうです」ときかされた。そうしたなかから生み出されたリヒテル氏の音楽



である、そこになにか人間を絶するもの、デモニッシュな世界を見出したとしてもいっこうにふしぎはない。リヒテル氏にとって、音楽とは、芸術とはなんであるのか。「それはなによりも人間にとって快いもの、人の心に満足をもたらすものだろう。満足すれば心もやわらぐ。美しいとは、なんと素晴らしいことではないか……。」

スポーツ・シャツに、白っぽいブレザー。「暑さはいっこう苦にならない」というピアニストは、そうした気軽な恰好で新幹線の旅をたのしんだ。大きな手をさしのべ、ハンチングをひょいと頭へのっけると、出迎えの車で雑踏のなかに姿を消した。はじめでの東京を、まるで以前から見知った街のように――

先日、ソヴィエトからエフゲニ・モギレフスキーという若いピアニストが初来日した。みごとに演奏だった。この二人、年齢的には親子の年柄だが、共通したところが多い。ともにオデッサ音楽院からモスクワ音楽院に進み、ネイガウス教授の教えを受けた。モギレフスキーは、あるいはリヒテルのあとをつぐ大ピアニストになるかもしれない。好きなピアニストは「リヒテル、ホロヴィッツ（しばらく間を置いて）それからギレリス」と答えた。

音楽をきくための本格派向き組み合せ。



●スピーカー E-313A X2本 ¥83,800(¥2)
●プレーヤー C-P-80M ¥68,000(¥2)

●アンプ Integra A-755 ¥62,800(¥2)
●チューナー Integra T-455 ¥55,000(¥2)

system-25
¥269,400

最高度に秀れたオーディオ装置で、選り抜かれた音楽を心ゆくまで聞く楽しみ――まさしくこれは、王者の楽しみとさえ言えるかも知れません。新製品E-313A・スピーカーシステムは、時流に抗して敢えてハードドームの真

値を問う二重支持・内周駆動方式によるドームの傑作です。アンプのIntegra A-755、チューナーのIntegra T-455は言うまでもない音質最優先のベストセラー・コンビです。プレーヤーはC-P-80M、DD方式の本格派です。

system11 ¥121,600(¥2) system15 ¥160,600(¥2) system17 ¥181,100(¥2)

■オンキヨー株式会社/東京都目黒区2番1号 03-220-3376(大代表)

オレク・カガンがモスクワに来て国立音楽院付属中央音楽学校に入学したのと、私が入ったのは丁度同七年でした。彼は子供の頃からすぐれた存在であつたにもかかわらず、目立って器用とはいへなかつたようです。今から思つてみれば、すぐに世間で騒がれる神童型のバイオリニストではなく大器的なバイオリニストだったのかもしれない。

彼の恩師、クズネツォフ氏は目に入れても痛くないほど可愛がっていたのを記憶しています。私は彼とは、小さい頃からしょっちゅう顔を合せていたにもかかわらず、なぜか口をきく機会がめつたになつたので、個人的なことはあまり知りません。でもその演奏はかなり長い期間にわたつて聞くチャンスにめぐまれていたので、カガンのことはかなり知っているとも思っています。

音にたいへん美しさを持ち、全体的におおらかであつたのは初めからですが、はっきりとした自分の演奏を見出しはじめたのは、やはりモスクワ音楽院に入ってからだと思います。そしてシベリウス・コンクールでの大成功となつて現れました。彼の演奏におけるシベリウスは線が太く現実的だと言つても良く、ちょっと意外な気もしましたが、あくまで美しいシベリウスでした。この頃はもうテクニックにも完璧性と浮えがみられ、十分に自分なりの表現を身につけたのだと思います。

クズネツォフ師が亡くなれば、カガンはタヴィド・オイストラッフの門下に入り、ますますさかんに演奏活動を行つて成長してゆきました。

チャイコフスキー・コンクルの時も政府から特選に選ばれて出場し、二位になりましたが、この時一位になつたヴィクトル・トレチャーコフとは今でもタイプの違う、しかし良きライバルのようです。よくトレチャーコフはコーガンの、カガンはオイストラッフの存在になるのでは、とうわさされたものです。目はいし二十代のバイオリニストのうちではなお、70年度チャイコフスキー・コンクルの一位、二位のクレーメル、スピヴァコフといった、まだ日本ではなじみの薄い人達いますがその人達の間で誰がどこまで自分を伸して行けるかが今後の楽しみです。

その中でカガンは技巧に走らず、音楽的に深い曲と特に取りこんでいたようで、初めのうちこそ無理があつたかもしれませんが、それ故にまた、先のある結果が生れたのだと思います。

前に書いたクレーメルとこのカガンは、オイストラッフの代表的な門下生であり、もっぱらこの二人によってソヴィエトの誇るオイストラッフ・タイプ



の演奏の将来がかかっているであろうと期待されています。そして対抗するタイプであるトレチャーコフとスピヴァコフが今は亡き名教授のヤンケレーヴィッチの門下生で、コーガンの要素を発展させることのできるバイオリニストではないかとこれも大いに期待されているわけです。

私もこういった期待を持つうちの一人ですから、いつも「どうしているかなあ」と気にかけていたところ、この春、カガンが憧れのピアニスト、リヒテルと共演するチャンスにめぐまれたことを知つて喜びました。昔はともかく、リヒテルがこの様な若手の音楽家と組むのはたいへん珍しいと思います。

リヒテルほどではないにしろ、カガンも地味な道を歩みながら努力を続けた人だと思います。日本を初め、まだ彼の名はあまり知られていないようですが、この幸運なコンビが続きますように、またカガンはコンチェルトと室内楽の両方を得意とし、たいそう広いレパートリーの持ち主ですからいろいろな面を我々に披露してくれる機会が多くなることを願つてやみません。

かつてコーガン、ベズロドメイ、イーゴリ・オイストラッフ等が三十代そこそこの若手として米目していたのがいつの間にか昔、中堅の四、五十代に手がとどいてしまいました。そして今、28歳のトレチャーコフやカガンを迎えてソヴィエトのバイオリニ界の変化を感じつつ、これが変化に留まらず、あるいはもっと大きな変化をとげてもっともつと発展することも期待したいと思います。

(ヴァイオリニスト)

春は
華やいだネックレスで
愛らしく
装つてみて下さい。

—世界の宝石店—

MIKIMOTO

本店—東京・銀座4丁目 TEL.535-4611

◆リヒテルさんとの出会い

1967年の5月、ミラノの私のアパートに忘れることが出来ない一通の手紙がとどきました。それは南フランスに於ける夏の音楽祭への招状状なのです。そのプログラムをみて驚きと喜びで一夜おぼれぬほど興奮したものでした。それは出演者の中に《スピヤトスラフ・リヒテル》の名前を認めたからです。この年の音楽祭はピアニスト中心で他には、ケンズ、ギレリス、フランソワ、パイロン・ジャニス等の競演で行われたのです。私がリヒテルさんに接したのはその時が初めてであり、シューベルトの「さすらい人」は今もって頭にこびりついております。私は幸運にも、これがきっかけとなってイタリア、フランス、ドイツ等々彼の演奏会のピアノ調律のお供をさせて戴くこととなったのです。

◆リヒテルさんの人となり

最初の旅行の時の私の緊張は大変なものでした。ちまたに伝わる先生評は、気づづかしく、人に合う

のはきらいで、神経がビリビリしている等々ですが、嬉しさよりも恐ろしさの感じが先にたちました。ところが第一印象は、なんとやさしい心づかい、思いやりの深い方と全く驚き感激したものです。それから今日まで、その人となりは益々尊敬を増すばかりです。音楽のあの深さと同様、いやそれ以上に人間味あふれるものがあります。1970年夏、初来日のときは、「幻のピアニスト」と言うタイトルがつけられ、帰国の頃は、「すべてを包む大きさと深さ」「あふれる人間味」等々、日本の聴衆にも神格化されたものが、事実上まことに素晴らしい暖かい人間味あふれる一人の音楽家であると理解されたことは、私の言のうらづけと云えるでしょう。

彼の音楽の深さ、人間味は、自然を愛することからはじまります。音楽会当日の午後、よくホテルを出て散歩をします。その散歩先は海岸であったり、自然公園であったり、一般聴衆はそれを知り「さすがに大家であり悠々としている」と感心しているよ

うですが、毎日の生活を共にしている私には、その通りとは思えません。自分のコンディション調整の一つのリズムと見るのです。何故なら、その前後の練習の真剣さ、そこで演奏前に自然に接し一種の気分転換をはかると同時に、音楽に自然美を植へこむのではないのでしょうか。

或る日、散歩で小高い山の林道を歩いていて、くもを顔にかけてしまいました。すると、落ちるくもをひろいあげるようにして「ああ、かわいそうなことをしてしまった」と言い、あとはくもが果があるとあの大きな体をしゃがみこむようにして果をつぶさなようにつとめるのです。この人間味が私たちのきくリヒテルの音楽と云えないでしょうか。

◆音楽家としてのきびしさ

又反面自分に対してはすごいきびしさもあります。演奏会が終って、私どもははとしてる夕食のおいしさ、ついビール一杯も飲みたくなり、ということでもよいげんでホテルの部屋へ帰り、しばらくする



京都の街を散歩するリヒテル



とピアノの音が聞えてくるのです。「おや今頃何処の部屋で」と思ってそっとドアを開けてみると、なんと先生の部屋からもれる音なのです。もう既に次のリハーサルが、と言うより自分自身の訓練が始まっているのです。私は自分の不勉強に何度反省させられたか、それでも今もってまねが出来ない自分のあわれさを、身にしみて感じてしまうのもこんな時です。

◆ユーモアのもちゆき

或る夜一緒に食事をしたときのお話です。

むかしむかし、と云っても20歳前（正確な年を聞いたのですが私の記憶がうすれております。少なくとも子供の頃は過ぎている）寒い冬の日、宿舎（ビルの高い所）でリングをかじりつつふと窓から道を見下すと、一人のおまわりさんが歩いていた。急にいたずら心がでてもっていたリングを、その人めがけて落したのです。そのリングが下に落ちるまでの気持はなんとも云えないものだったよ。あたりませ

んように、あなたと面白いな、とこんな話をする時のリヒテルさんの顔は、むじきでかわいらしく、少しテレ乍ら、嬉しそうに一口一口、童話を話すようです。

また1970年秋、日本の演奏スケジュールが終って、例によって汽船で帰国しました。それから1ヶ月後、バリ近郊のベルサイユで演奏会があり、私は飛行機で飛んだのですが、お会いした最初の言葉が『日本からの船はものすこなかったよ。日本海があられ廻り、船は大ゆれ、荷物が右へ左へと大運動会だったんだよ』私ならばききと青くなって、もう船はこりこりなんて思っただけですが、いかに楽しそうに話されるのでつい心配などせず笑顔をきいているふんいきになってしまいます。

音楽会のプログラムに甚だ不謹慎な文章を書き失礼とは思いましたが彼の音楽は、どんな贅辞を書くより聴くにしかずです。以上の人となりエピソードなど頭に浮べて聴くときと楽しき倍増、忘れられない素晴らしい一夕となることでしょう。

（日本楽器ピアノ研究室）



（上）志摩の海辺で／（下）マントンにて。1969年

リヒテルは1970年に来日した。そのためわが国ではすでに彼の演奏をきいた人が多いが、彼は来日前にもう今世紀最大のピアニストの一人と考えられていた。それも海外からの報道を無批判に受け入れたからではなく、真底からそう考えている人が多かったのである。

それはレコードのおかげであり、わが国の聴衆は当時約60枚に及ぶリヒテルのレコードによって、このピアニストについての多くの知識を得ていた。私はその頃RG誌にリヒテルのディスコグラフィを記し、来日時のプログラムにも彼のレコードのことを書いた。

しかし、その後の状況も同じようなものである。それから約4年の間に、リヒテルの評価はますます高まり、変化するところもあったが、それも来日後に発売された新しいレコードのためであろう。したがって1970年の来日前に発売された多くの名盤は周知のものとし、この限られたスペースでは、1970年以後に発売された比較的最近のレコードを、だいた

い録音順にご紹介することにした。

- 1969年9月録音（ベルリン）
ベートーヴェン／三重協奏曲（オーストラリア(VI.)、ロストロポーヴィチ(Vc.)、カラヤン指揮、ベルリン・フィル）（新世界 SMK-7630）
- 1969年10～11月録音（パリ）
ブラームス／ピアノ協奏曲第2番（マゼール指揮、パリ管弦楽団）（エンジェル EAA-115）、バルトーク／ピアノ協奏曲第2番（マゼール指揮、パリ管弦楽団）
- 1970年7月（ロンドン）
プロコフィエフ／ピアノ協奏曲第5番（マゼール指揮、ロンドン交響楽団）（以上エンジェル EAA-85001）
- 1970年7月（サルツブルク）
ベートーヴェン／六つの変奏曲作品34、「トルコ行進曲」の主題による六つの変奏曲作品76、エロイカの主題による変奏曲とフーガ作品35（新世界 SMK-7660）
- 1970年夏（サルツブルク）
バッハ／平均律クラヴィア曲集第1巻全曲



- （新世界 SMK-7670～72）
ブラームス／美しきマゼローネのロマンス（フィッシャー＝ディースカウ(Br.)）（新世界MKX-2001）
 - 1971年9月（サルツブルク）
ベートーヴェン／ピアノ・ソナタ第27番作品90、シューマン／交響的練習曲（新世界 MKX-2002）
ラフマニノフ／前奏曲集作品23、32より（新世界 MKX-2003）
シューマン／色とりどりの作品、ブラームス／六つの小品作品 118より（新世界 MKX-2004）
 - 1973年2月および8～9月
バッハ／平均律クラヴィア曲集第2巻全曲（新世界 SMK-7810～12）
- 以上10点14枚がリヒテルの近作である。近作といっても1969年、万国博の年にはじめて来日する前年からのものだが、1972年を除いて毎年西ヨーロッパを舞台に録音をつけているのは興味深い。おそらく夏のサルツブルク音楽祭がリヒテルのきめたレコーディングの時期であるらしく思われるが、かつて



は録音ざらいといわれていたりリヒテルが、継続的にレコードをつくっているのは喜ぶべきことである。

ところで、この10点のレコードだが、どれもがあまりにもみごとな演奏なので、これに順位をつけることはむずかしい。1970年以前に発売されたレコードと合わせて約70枚ということになり、それらのリヒテルのレコードがことごとくすぐれているとはいえないが、すくなくとも上記の10点に関してはいずれも演奏・録音ともに最優秀の傑作といわなければならない。

しかも、これらをきいて気が付くのは、リヒテルの演奏がかつてのものと比較しておどろほど洗練され、個性的な解釈を残しながら普遍的な様式とも

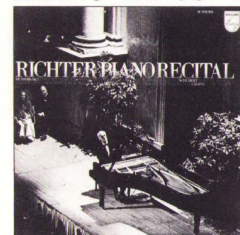
いえる音楽をつくりはじめたことである。そのことは1970年の来日でも痛切に感じたことであるが、たとえばブラームスの「第2協奏曲」を1960年10月にシカゴで録音されたRCA盤(SRA-2706)と比較すると、直ちにリヒテルの円熟が明らかになる。

このようないい方は誤解を招きやすいが、彼のような大家でも常に成長をつけており、そのことが10年の時間をおいたレコードの比較で明瞭に示されているのである。もちろんバッハの「平均律第1巻」のなかからの数曲を、1962年に録音されたグラモフォン(MG-2193)と比較しても同じことがいえる。それにこれらの10点は録音が従来のものにくらべて格段によくなっており、リヒテルの精妙なタッチを

よく伝えている。この10点は、すべてがピアノ・レコードのなかで光芒を放つ傑作であり、ひとつひとつの演奏が珠玉のような名品である。それらはリヒテルが底知れぬ力をもった芸術家であることの証明といえるだろう。

私はそのなかでバッハの「平均律」全2巻をこのうなぐ愛聴している。およそこれほどぐりかえして聴きない作品もめずらしいが、リヒテルの演奏もまた透徹したきびきるとともに温味ゆたかな境地に達しているからである。これらのレコードをきくだけで、リヒテルが今世紀最高のピアニストであることを確信する人は、おそらく私だけではあるまい。

巨匠! リヒテルの名演による名曲の数々!



展覧会の絵／別れの曲ー
リヒテル・ピアノ・リサイタル
組曲「展覧会の絵」(ムソルグスキー)
ソナタ(ソナタ第20番)長調作品49の2(ベートーヴェン)
交響の時へ長調作品94の1(シューベルト)
即興曲集長調作品90の2(シューベルト)
鬼火(超絶技巧練習曲第5巻)3(リスト)
別れの曲(エチュード)長調作品10の3(ショパン)
●X-5530 ¥2,300



●チャイコフスキー
ピアノ協奏曲第1番変ロ長調作品23*
●ラフマニノフ
ピアノ協奏曲第2番ハ短調作品18
リヒテル(ピアノ)ムラヴィンスキー、サンデルリント指揮レニングラードフィルハーモニー管弦楽団
●FG-97(M) ¥1,300



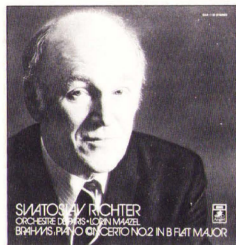
●モーツァルト
ピアノ協奏曲第20番ニ短調K.466*
●リヒテル
ピアノ協奏曲第1番ニ短調BWV1052
リヒテル(ピアノ)サンデルリント指揮ソフィエト国立フィルハーモニー管弦楽団、ソフィエト国立交響楽団
●FG-102(M) ¥1,300



●リスト
ピアノ協奏曲第1番／第2番
リヒテル(ピアノ)コンラッド・フランシス指揮ロンドン交響楽団
●FG-105 ¥1,300

「楽興の時」ーリヒテル・ソフィア・リサイタル
交響の時(組曲)4の1(モーツァルト)2の1(モーツァルト)2の2(モーツァルト)
練習曲作品10の3(ショパン)3の1(ショパン)3の2(ショパン)3の3(ショパン)
練習曲作品10の4(ショパン)3の4(ショパン)3の5(ショパン)
練習曲作品10の6(ショパン)3の6(ショパン)3の7(ショパン)
練習曲作品10の8(ショパン)3の8(ショパン)3の9(ショパン)
練習曲作品10の10(ショパン)3の10(ショパン)3の11(ショパン)
練習曲作品10の12(ショパン)3の12(ショパン)3の13(ショパン)
練習曲作品10の14(ショパン)3の14(ショパン)3の15(ショパン)
練習曲作品10の16(ショパン)3の16(ショパン)3の17(ショパン)
練習曲作品10の18(ショパン)3の18(ショパン)3の19(ショパン)
練習曲作品10の20(ショパン)3の20(ショパン)3の21(ショパン)
練習曲作品10の22(ショパン)3の22(ショパン)3の23(ショパン)
練習曲作品10の24(ショパン)3の24(ショパン)3の25(ショパン)
練習曲作品10の26(ショパン)3の26(ショパン)3の27(ショパン)
練習曲作品10の28(ショパン)3の28(ショパン)3の29(ショパン)
練習曲作品10の30(ショパン)3の30(ショパン)3の31(ショパン)
練習曲作品10の32(ショパン)3の32(ショパン)3の33(ショパン)
練習曲作品10の34(ショパン)3の34(ショパン)3の35(ショパン)
練習曲作品10の36(ショパン)3の36(ショパン)3の37(ショパン)
練習曲作品10の38(ショパン)3の38(ショパン)3の39(ショパン)
練習曲作品10の40(ショパン)3の40(ショパン)3の41(ショパン)
練習曲作品10の42(ショパン)3の42(ショパン)3の43(ショパン)
練習曲作品10の44(ショパン)3の44(ショパン)3の45(ショパン)
練習曲作品10の46(ショパン)3の46(ショパン)3の47(ショパン)
練習曲作品10の48(ショパン)3の48(ショパン)3の49(ショパン)
練習曲作品10の50(ショパン)3の50(ショパン)3の51(ショパン)
練習曲作品10の52(ショパン)3の52(ショパン)3の53(ショパン)
練習曲作品10の54(ショパン)3の54(ショパン)3の55(ショパン)
練習曲作品10の56(ショパン)3の56(ショパン)3の57(ショパン)
練習曲作品10の58(ショパン)3の58(ショパン)3の59(ショパン)
練習曲作品10の60(ショパン)3の60(ショパン)3の61(ショパン)
練習曲作品10の62(ショパン)3の62(ショパン)3の63(ショパン)
練習曲作品10の64(ショパン)3の64(ショパン)3の65(ショパン)
練習曲作品10の66(ショパン)3の66(ショパン)3の67(ショパン)
練習曲作品10の68(ショパン)3の68(ショパン)3の69(ショパン)
練習曲作品10の70(ショパン)3の70(ショパン)3の71(ショパン)
練習曲作品10の72(ショパン)3の72(ショパン)3の73(ショパン)
練習曲作品10の74(ショパン)3の74(ショパン)3の75(ショパン)
練習曲作品10の76(ショパン)3の76(ショパン)3の77(ショパン)
練習曲作品10の78(ショパン)3の78(ショパン)3の79(ショパン)
練習曲作品10の80(ショパン)3の80(ショパン)3の81(ショパン)
練習曲作品10の82(ショパン)3の82(ショパン)3の83(ショパン)
練習曲作品10の84(ショパン)3の84(ショパン)3の85(ショパン)
練習曲作品10の86(ショパン)3の86(ショパン)3の87(ショパン)
練習曲作品10の88(ショパン)3の88(ショパン)3の89(ショパン)
練習曲作品10の90(ショパン)3の90(ショパン)3の91(ショパン)
練習曲作品10の92(ショパン)3の92(ショパン)3の93(ショパン)
練習曲作品10の94(ショパン)3の94(ショパン)3の95(ショパン)
練習曲作品10の96(ショパン)3の96(ショパン)3の97(ショパン)
練習曲作品10の98(ショパン)3の98(ショパン)3の99(ショパン)
練習曲作品10の100(ショパン)3の100(ショパン)3の101(ショパン)
練習曲作品10の102(ショパン)3の102(ショパン)3の103(ショパン)
練習曲作品10の104(ショパン)3の104(ショパン)3の105(ショパン)
練習曲作品10の106(ショパン)3の106(ショパン)3の107(ショパン)
練習曲作品10の108(ショパン)3の108(ショパン)3の109(ショパン)
練習曲作品10の110(ショパン)3の110(ショパン)3の111(ショパン)
練習曲作品10の112(ショパン)3の112(ショパン)3の113(ショパン)
練習曲作品10の114(ショパン)3の114(ショパン)3の115(ショパン)
練習曲作品10の116(ショパン)3の116(ショパン)3の117(ショパン)
練習曲作品10の118(ショパン)3の118(ショパン)3の119(ショパン)
練習曲作品10の120(ショパン)3の120(ショパン)3の121(ショパン)
練習曲作品10の122(ショパン)3の122(ショパン)3の123(ショパン)
練習曲作品10の124(ショパン)3の124(ショパン)3の125(ショパン)
練習曲作品10の126(ショパン)3の126(ショパン)3の127(ショパン)
練習曲作品10の128(ショパン)3の128(ショパン)3の129(ショパン)
練習曲作品10の130(ショパン)3の130(ショパン)3の131(ショパン)
練習曲作品10の132(ショパン)3の132(ショパン)3の133(ショパン)
練習曲作品10の134(ショパン)3の134(ショパン)3の135(ショパン)
練習曲作品10の136(ショパン)3の136(ショパン)3の137(ショパン)
練習曲作品10の138(ショパン)3の138(ショパン)3の139(ショパン)
練習曲作品10の140(ショパン)3の140(ショパン)3の141(ショパン)
練習曲作品10の142(ショパン)3の142(ショパン)3の143(ショパン)
練習曲作品10の144(ショパン)3の144(ショパン)3の145(ショパン)
練習曲作品10の146(ショパン)3の146(ショパン)3の147(ショパン)
練習曲作品10の148(ショパン)3の148(ショパン)3の149(ショパン)
練習曲作品10の150(ショパン)3の150(ショパン)3の151(ショパン)
練習曲作品10の152(ショパン)3の152(ショパン)3の153(ショパン)
練習曲作品10の154(ショパン)3の154(ショパン)3の155(ショパン)
練習曲作品10の156(ショパン)3の156(ショパン)3の157(ショパン)
練習曲作品10の158(ショパン)3の158(ショパン)3の159(ショパン)
練習曲作品10の160(ショパン)3の160(ショパン)3の161(ショパン)
練習曲作品10の162(ショパン)3の162(ショパン)3の163(ショパン)
練習曲作品10の164(ショパン)3の164(ショパン)3の165(ショパン)
練習曲作品10の166(ショパン)3の166(ショパン)3の167(ショパン)
練習曲作品10の168(ショパン)3の168(ショパン)3の169(ショパン)
練習曲作品10の170(ショパン)3の170(ショパン)3の171(ショパン)
練習曲作品10の172(ショパン)3の172(ショパン)3の173(ショパン)
練習曲作品10の174(ショパン)3の174(ショパン)3の175(ショパン)
練習曲作品10の176(ショパン)3の176(ショパン)3の177(ショパン)
練習曲作品10の178(ショパン)3の178(ショパン)3の179(ショパン)
練習曲作品10の180(ショパン)3の180(ショパン)3の181(ショパン)
練習曲作品10の182(ショパン)3の182(ショパン)3の183(ショパン)
練習曲作品10の184(ショパン)3の184(ショパン)3の185(ショパン)
練習曲作品10の186(ショパン)3の186(ショパン)3の187(ショパン)
練習曲作品10の188(ショパン)3の188(ショパン)3の189(ショパン)
練習曲作品10の190(ショパン)3の190(ショパン)3の191(ショパン)
練習曲作品10の192(ショパン)3の192(ショパン)3の193(ショパン)
練習曲作品10の194(ショパン)3の194(ショパン)3の195(ショパン)
練習曲作品10の196(ショパン)3の196(ショパン)3の197(ショパン)
練習曲作品10の198(ショパン)3の198(ショパン)3の199(ショパン)
練習曲作品10の200(ショパン)3の200(ショパン)3の201(ショパン)
練習曲作品10の202(ショパン)3の202(ショパン)3の203(ショパン)
練習曲作品10の204(ショパン)3の204(ショパン)3の205(ショパン)
練習曲作品10の206(ショパン)3の206(ショパン)3の207(ショパン)
練習曲作品10の208(ショパン)3の208(ショパン)3の209(ショパン)
練習曲作品10の210(ショパン)3の210(ショパン)3の211(ショパン)
練習曲作品10の212(ショパン)3の212(ショパン)3の213(ショパン)
練習曲作品10の214(ショパン)3の214(ショパン)3の215(ショパン)
練習曲作品10の216(ショパン)3の216(ショパン)3の217(ショパン)
練習曲作品10の218(ショパン)3の218(ショパン)3の219(ショパン)
練習曲作品10の220(ショパン)3の220(ショパン)3の221(ショパン)
練習曲作品10の222(ショパン)3の222(ショパン)3の223(ショパン)
練習曲作品10の224(ショパン)3の224(ショパン)3の225(ショパン)
練習曲作品10の226(ショパン)3の226(ショパン)3の227(ショパン)
練習曲作品10の228(ショパン)3の228(ショパン)3の229(ショパン)
練習曲作品10の230(ショパン)3の230(ショパン)3の231(ショパン)
練習曲作品10の232(ショパン)3の232(ショパン)3の233(ショパン)
練習曲作品10の234(ショパン)3の234(ショパン)3の235(ショパン)
練習曲作品10の236(ショパン)3の236(ショパン)3の237(ショパン)
練習曲作品10の238(ショパン)3の238(ショパン)3の239(ショパン)
練習曲作品10の240(ショパン)3の240(ショパン)3の241(ショパン)
練習曲作品10の242(ショパン)3の242(ショパン)3の243(ショパン)
練習曲作品10の244(ショパン)3の244(ショパン)3の245(ショパン)
練習曲作品10の246(ショパン)3の246(ショパン)3の247(ショパン)
練習曲作品10の248(ショパン)3の248(ショパン)3の249(ショパン)
練習曲作品10の250(ショパン)3の250(ショパン)3の251(ショパン)
練習曲作品10の252(ショパン)3の252(ショパン)3の253(ショパン)
練習曲作品10の254(ショパン)3の254(ショパン)3の255(ショパン)
練習曲作品10の256(ショパン)3の256(ショパン)3の257(ショパン)
練習曲作品10の258(ショパン)3の258(ショパン)3の259(ショパン)
練習曲作品10の260(ショパン)3の260(ショパン)3の261(ショパン)
練習曲作品10の262(ショパン)3の262(ショパン)3の263(ショパン)
練習曲作品10の264(ショパン)3の264(ショパン)3の265(ショパン)
練習曲作品10の266(ショパン)3の266(ショパン)3の267(ショパン)
練習曲作品10の268(ショパン)3の268(ショパン)3の269(ショパン)
練習曲作品10の270(ショパン)3の270(ショパン)3の271(ショパン)
練習曲作品10の272(ショパン)3の272(ショパン)3の273(ショパン)
練習曲作品10の274(ショパン)3の274(ショパン)3の275(ショパン)
練習曲作品10の276(ショパン)3の276(ショパン)3の277(ショパン)
練習曲作品10の278(ショパン)3の278(ショパン)3の279(ショパン)
練習曲作品10の280(ショパン)3の280(ショパン)3の281(ショパン)
練習曲作品10の282(ショパン)3の282(ショパン)3の283(ショパン)
練習曲作品10の284(ショパン)3の284(ショパン)3の285(ショパン)
練習曲作品10の286(ショパン)3の286(ショパン)3の287(ショパン)
練習曲作品10の288(ショパン)3の288(ショパン)3の289(ショパン)
練習曲作品10の290(ショパン)3の290(ショパン)3の291(ショパン)
練習曲作品10の292(ショパン)3の292(ショパン)3の293(ショパン)
練習曲作品10の294(ショパン)3の294(ショパン)3の295(ショパン)
練習曲作品10の296(ショパン)3の296(ショパン)3の297(ショパン)
練習曲作品10の298(ショパン)3の298(ショパン)3の299(ショパン)
練習曲作品10の300(ショパン)3の300(ショパン)3の301(ショパン)
練習曲作品10の302(ショパン)3の302(ショパン)3の303(ショパン)
練習曲作品10の304(ショパン)3の304(ショパン)3の305(ショパン)
練習曲作品10の306(ショパン)3の306(ショパン)3の307(ショパン)
練習曲作品10の308(ショパン)3の308(ショパン)3の309(ショパン)
練習曲作品10の310(ショパン)3の310(ショパン)3の311(ショパン)
練習曲作品10の312(ショパン)3の312(ショパン)3の313(ショパン)
練習曲作品10の314(ショパン)3の314(ショパン)3の315(ショパン)
練習曲作品10の316(ショパン)3の316(ショパン)3の317(ショパン)
練習曲作品10の318(ショパン)3の318(ショパン)3の319(ショパン)
練習曲作品10の320(ショパン)3の320(ショパン)3の321(ショパン)
練習曲作品10の322(ショパン)3の322(ショパン)3の323(ショパン)
練習曲作品10の324(ショパン)3の324(ショパン)3の325(ショパン)
練習曲作品10の326(ショパン)3の326(ショパン)3の327(ショパン)
練習曲作品10の328(ショパン)3の328(ショパン)3の329(ショパン)
練習曲作品10の330(ショパン)3の330(ショパン)3の331(ショパン)
練習曲作品10の332(ショパン)3の332(ショパン)3の333(ショパン)
練習曲作品10の334(ショパン)3の334(ショパン)3の335(ショパン)
練習曲作品10の336(ショパン)3の336(ショパン)3の337(ショパン)
練習曲作品10の338(ショパン)3の338(ショパン)3の339(ショパン)
練習曲作品10の340(ショパン)3の340(ショパン)3の341(ショパン)
練習曲作品10の342(ショパン)3の342(ショパン)3の343(ショパン)
練習曲作品10の344(ショパン)3の344(ショパン)3の345(ショパン)
練習曲作品10の346(ショパン)3の346(ショパン)3の347(ショパン)
練習曲作品10の348(ショパン)3の348(ショパン)3の349(ショパン)
練習曲作品10の350(ショパン)3の350(ショパン)3の351(ショパン)
練習曲作品10の352(ショパン)3の352(ショパン)3の353(ショパン)
練習曲作品10の354(ショパン)3の354(ショパン)3の355(ショパン)
練習曲作品10の356(ショパン)3の356(ショパン)3の357(ショパン)
練習曲作品10の358(ショパン)3の358(ショパン)3の359(ショパン)
練習曲作品10の360(ショパン)3の360(ショパン)3の361(ショパン)
練習曲作品10の362(ショパン)3の362(ショパン)3の363(ショパン)
練習曲作品10の364(ショパン)3の364(ショパン)3の365(ショパン)
練習曲作品10の366(ショパン)3の366(ショパン)3の367(ショパン)
練習曲作品10の368(ショパン)3の368(ショパン)3の369(ショパン)
練習曲作品10の370(ショパン)3の370(ショパン)3の371(ショパン)
練習曲作品10の372(ショパン)3の372(ショパン)3の373(ショパン)
練習曲作品10の374(ショパン)3の374(ショパン)3の375(ショパン)
練習曲作品10の376(ショパン)3の376(ショパン)3の377(ショパン)
練習曲作品10の378(ショパン)3の378(ショパン)3の379(ショパン)
練習曲作品10の380(ショパン)3の380(ショパン)3の381(ショパン)
練習曲作品10の382(ショパン)3の382(ショパン)3の383(ショパン)
練習曲作品10の384(ショパン)3の384(ショパン)3の385(ショパン)
練習曲作品10の386(ショパン)3の386(ショパン)3の387(ショパン)
練習曲作品10の388(ショパン)3の388(ショパン)3の389(ショパン)
練習曲作品10の390(ショパン)3の390(ショパン)3の391(ショパン)
練習曲作品10の392(ショパン)3の392(ショパン)3の393(ショパン)
練習曲作品10の394(ショパン)3の394(ショパン)3の395(ショパン)
練習曲作品10の396(ショパン)3の396(ショパン)3の397(ショパン)
練習曲作品10の398(ショパン)3の398(ショパン)3の399(ショパン)
練習曲作品10の400(ショパン)3の400(ショパン)3の401(ショパン)
練習曲作品10の402(ショパン)3の402(ショパン)3の403(ショパン)
練習曲作品10の404(ショパン)3の404(ショパン)3の405(ショパン)
練習曲作品10の406(ショパン)3の406(ショパン)3の407(ショパン)
練習曲作品10の408(ショパン)3の408(ショパン)3の409(ショパン)
練習曲作品10の410(ショパン)3の410(ショパン)3の411(ショパン)
練習曲作品10の412(ショパン)3の412(ショパン)3の413(ショパン)
練習曲作品10の414(ショパン)3の414(ショパン)3の415(ショパン)
練習曲作品10の416(ショパン)3の416(ショパン)3の417(ショパン)
練習曲作品10の418(ショパン)3の418(ショパン)3の419(ショパン)
練習曲作品10の420(ショパン)3の420(ショパン)3の421(ショパン)
練習曲作品10の422(ショパン)3の422(ショパン)3の423(ショパン)
練習曲作品10の424(ショパン)3の424(ショパン)3の425(ショパン)
練習曲作品10の426(ショパン)3の426(ショパン)3の427(ショパン)
練習曲作品10の428(ショパン)3の428(ショパン)3の429(ショパン)
練習曲作品10の430(ショパン)3の430(ショパン)3の431(ショパン)
練習曲作品10の432(ショパン)3の432(ショパン)3の433(ショパン)
練習曲作品10の434(ショパン)3の434(ショパン)3の435(ショパン)
練習曲作品10の436(ショパン)3の436(ショパン)3の437(ショパン)
練習曲作品10の438(ショパン)3の438(ショパン)3の439(ショパン)
練習曲作品10の440(ショパン)3の440(ショパン)3の441(ショパン)
練習曲作品10の442(ショパン)3の442(ショパン)3の443(ショパン)
練習曲作品10の444(ショパン)3の444(ショパン)3の445(ショパン)
練習曲作品10の446(ショパン)3の446(ショパン)3の447(ショパン)
練習曲作品10の448(ショパン)3の448(ショパン)3の449(ショパン)
練習曲作品10の450(ショパン)3の450(ショパン)3の451(ショパン)
練習曲作品10の452(ショパン)3の452(ショパン)3の453(ショパン)
練習曲作品10の454(ショパン)3の454(ショパン)3の455(ショパン)
練習曲作品10の456(ショパン)3の456(ショパン)3の457(ショパン)
練習曲作品10の458(ショパン)3の458(ショパン)3の459(ショパン)
練習曲作品10の460(ショパン)3の460(ショパン)3の461(ショパン)
練習曲作品10の462(ショパン)3の462(ショパン)3の463(ショパン)
練習曲作品10の464(ショパン)3の464(ショパン)3の465(ショパン)
練習曲作品10の466(ショパン)3の466(ショパン)3の467(ショパン)
練習曲作品10の468(ショパン)3の468(ショパン)3の469(ショパン)
練習曲作品10の470(ショパン)3の470(ショパン)3の471(ショパン)
練習曲作品10の472(ショパン)3の472(ショパン)3の473(ショパン)
練習曲作品10の474(ショパン)3の474(ショパン)3の475(ショパン)
練習曲作品10の476(ショパン)3の476(ショパン)3の477(ショパン)
練習曲作品10の478(ショパン)3の478(ショパン)3の479(ショパン)
練習曲作品10の480(ショパン)3の480(ショパン)3の481(ショパン)
練習曲作品10の482(ショパン)3の482(ショパン)3の483(ショパン)
練習曲作品10の484(ショパン)3の484(ショパン)3の485(ショパン)
練習曲作品10の486(ショパン)3の486(ショパン)3の487(ショパン)
練習曲作品10の488(ショパン)3の488(ショパン)3の489(ショパン)
練習曲作品10の490(ショパン)3の490(ショパン)3の491(ショパン)
練習曲作品10の492(ショパン)3の492(ショパン)3の493(ショパン)
練習曲作品10の494(ショパン)3の494(ショパン)3の495(ショパン)
練習曲作品10の496(ショパン)3の496(ショパン)3の497(ショパン)
練習曲作品10の498(ショパン)3の498(ショパン)3の499(ショパン)
練習曲作品10の500(ショパン)3の500(ショパン)3の501(ショパン)
練習曲作品10の502(ショパン)3の502(ショパン)3の503(ショパン)
練習曲作品10の504(ショパン)3の504(ショパン)3の505(ショパン)
練習曲作品10の506(ショパン)3の506(ショパン)3の507(ショパン)
練習曲作品10の508(ショパン)3の508(ショパン)3の509(ショパン)
練習曲作品10の510(ショパン)3の510(ショパン)3の511(ショパン)
練習曲作品10の512(ショパン)3の512(ショパン)3の513(ショパン)
練習曲作品10の514(ショパン)3の514(ショパン)3の515(ショパン)
練習曲作品10の516(ショパン)3の516(ショパン)3の517(ショパン)
練習曲作品10の518(ショパン)3の518(ショパン)3の519(ショパン)
練習曲作品10の520(ショパン)3の520(ショパン)3の521(ショパン)
練習曲作品10の522(ショパン)3の522(ショパン)3の523(ショパン)
練習曲作品10の524(ショパン)3の524(ショパン)3の525(ショパン)
練習曲作品10の526(ショパン)3の526(ショパン)3の527(ショパン)
練習曲作品10の528(ショパン)3の528(ショパン)3の529(ショパン)
練習曲作品10の530(ショパン)3の530(ショパン)3の531(ショパン)
練習曲作品10の532(ショパン)3の532(ショパン)3の533(ショパン)
練習曲作品10の534(ショパン)3の534(ショパン)3の535(ショパン)
練習曲作品10の536(ショパン)3の536(ショパン)3の537(ショパン)
練習曲作品10の538(ショパン)3の538(ショパン)3の539(ショパン)
練習曲作品10の540(ショパン)3の540(ショパン)3の541(ショパン)
練習曲作品10の542(ショパン)3の542(ショパン)3の543(ショパン)
練習曲作品10の544(ショパン)3の544(ショパン)3の545(ショパン)
練習曲作品10の546(ショパン)3の546(ショパン)3の547(ショパン)
練習曲作品10の548(ショパン)3の548(ショパン)3の549(ショパン)
練習曲作品10の550(ショパン)3の550(ショパン)3の551(ショパン)
練習曲作品10の552(ショパン)3の552(ショパン)3の553(ショパン)
練習曲作品10の554(ショパン)3の554(ショパン)3の555(ショパン)
練習曲作品10の556(ショパン)3の556(ショパン)3の557(ショパン)
練習曲作品10の558(ショパン)3の558(ショパン)3の559(ショパン)
練習曲作品10の560(ショパン)3の560(ショパン)3の561(ショパン)
練習曲作品10の562(ショパン)3の562(ショパン)3の563(ショパン)
練習曲作品10の564(ショパン)3の564(ショパン)3の565(ショパン)
練習曲作品10の566(ショパン)3の566(ショパン)3の567(ショパン)
練習曲作品10の568(ショパン)3の568(ショパン)3の569(ショパン)
練習曲作品10の570(ショパン)3の570(ショパン)3の571(ショパン)
練習曲作品10の572(ショパン)3の572(ショパン)3の573(ショパン)
練習曲作品10の574(ショパン)3の574(ショパン)3の575(ショパン)
練習曲作品10の576(ショパン)3の576(ショパン)3の577(ショパン)
練習曲作品10の578(ショパン)3の578(ショパン)3の579(ショパン)
練習曲作品10の580(ショパン)3の580(ショパン)3の581(ショパン)
練習曲作品10の582(ショパン)3の582(ショパン)3の583(ショパン)
練習曲作品10の584(ショパン)3の584(ショパン)3の585(ショパン)
練習曲作品1

Sviatoslav Richter on EMI ANGEL



●リヒテル&マゼールの出会いが生んだ完全無比な圧倒的な名演

ブラームス ピアノ協奏曲第2番変ロ長調

(ピアノ)スヴャトスラフ・リヒテル
ローリン・マゼール指揮 バリ管弦楽団
EAA-115 30cmステレオ ¥2,000 (PTS-DX:クリヤーサウンド) レコード芸術/ステレオ芸術誌推薦盤



●リヒテルがついに極めた現代協奏曲の奥義

バルトーク ピアノ協奏曲第2番 プロコフィエフ ピアノ協奏曲第5番ト長調

(ピアノ)スヴャトスラフ・リヒテル
ローリン・マゼール指揮 バリ管弦楽団/ロンドン交響楽団
EAA-85001 30cmステレオ ¥2,300 (PTS-DX:クリヤーサウンド)
レコード芸術/ステレオ芸術/ステレオ誌推薦盤



●ここにリヒテルの神技のすべてが結集

リヒテル テンペスト

ピアノ・ソナタ第17番「テンペスト」
(ベートーヴェン)
「さすらい人」幻想曲(シューベルト)
幻想曲・長調・短調(以上シューマン)
(ピアノ)スヴャトスラフ・リヒテル
AA-93039 B 30cmステレオ2枚組 ¥3,300

ベートーヴェン
ピアノ・ソナタ第17番「テンペスト」

シューマン
幻想曲ハ長調
(ピアノ)スヴャトスラフ・リヒテル
EAA-115 30cmステレオ ¥2,000

シューマン
ピアノ・ソナタ第2番ト短調
蝶々
ウィーンの謝肉祭の道化
(ピアノ)スヴャトスラフ・リヒテル
AA-8515 30cmステレオ ¥2,300

シューベルト
「さすらい人」幻想曲

ピアノ・ソナタ第13番イ長調
蝶々
(ピアノ)スヴャトスラフ・リヒテル
EAA-129 30cmステレオ ¥2,900

シューベルト
「さすらい人」幻想曲
ピアノ・ソナタ D.664
(ピアノ)スヴャトスラフ・リヒテル
AA-8514 30cmステレオ ¥2,300



エンジェルレコード 発売元 東京EMI株式会社

Grotrian-Steinweg



Grotrian Steinweg MODEL 135

グロトリアン-シュタインヴェヒ ピアノ (西ドイツ製)

●グロトリアン-シュタインヴェヒ グランドピアノはドイツ生れの世界の銘器として日本万国博覧会の西ドイツ館にも展示され世界の人々に公開された
独特のスティールフレーム、特殊響板をそなえた最新設計のグランドピアノです。 ●アップライトピアノは自他共に世界一をはこる幾多の特許をもつ
西ドイツの伝統ある銘器です。

輸入 発売元

合資会社 丸一商店

●グロトリアン-シュタインヴェヒ ピアノの総合カタログをご希望の方はご一報下さいませ。

〒541 大阪市東区高麗橋1丁目27番地 電話(06)201-0041(代)

出張所=〒171 東京都豊島区目白台2丁目18-14 電話(03)985-6617



魅惑の館——優雅な社交場

■くわしくは

〒117
東京都芝罘区大山崎町 平 618
☎03-561-0000・0003・1201(代)
●日暮山崎駅前大山崎ビル5F(〒117-0004)
●日暮山崎より車(20分)15km
●大崎駅より徒歩15分(大崎山崎ビル5F) 車で約30分(30km)
●大崎駅より徒歩15分(大崎山崎ビル5F) 車で約30分(30km)

♪ 会員募集中 ♪

メンバーズ・クラブ
大山崎山荘

ヨーロッパの9都市へ 北から、南から、東から。

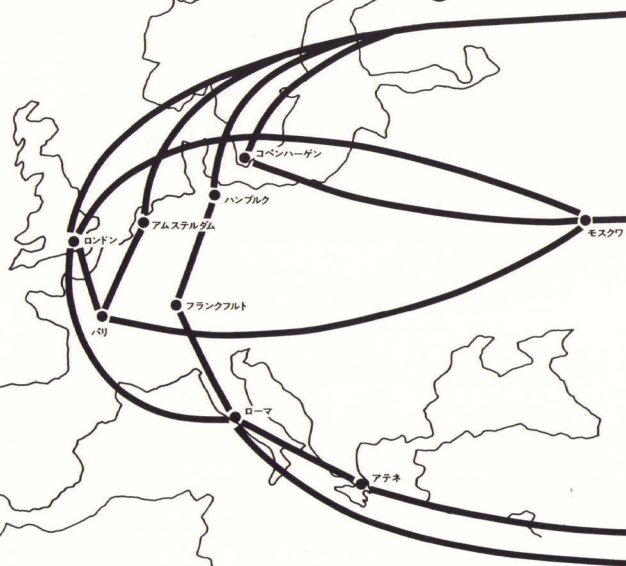
ヨーロッパへは、便利な日航機で
日本とヨーロッパをガッチリ結ぶ、日本航空
ヨーロッパ線。北からヨーロッパへは北
回り線は、日航ジャンボが主力のメイン・ルー
ト。お急ぎの方には、東からの近道を飛ぶモ
スクワ線がモテています。そして、東南アジ
ア・インド・中近東のエキゾチック・ゾーン
に、途中降機が楽しめる南回り線。時間の余
裕がありなら、ぜひおすすめしたい路線です。
ヨーロッパ観光をなさりたい方には、ジャ
ルパックでもたくさんのコースを用意しています。

東京支店 03-747 3111 鹿児島支店 0992-58 2314
大阪支店 06-1203 1212 沖縄支店 0988-55 3311
名古屋支店 052-561 2401 札幌支店 011-231-4411
福岡支店 092-27 4411

世界を結ぶ日本の翼——



日本航空



世界の名門// 巨匠ノイマン、名指揮者コシュラー、名チェリスト フフロと共に来日!

チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

特別出演: 巨匠アイザック・スターン



6月11日(火) 7時 東京文化会館 ①
6月14日(金) 7時 大阪フェスティバルホール ②
6月29日(土) 7時 東京文化会館 ③

最高の組合せ// スターンとノイマン=チェコ・フィル

6月12日(水) 7時 NHKホール ④
6月21日(金) 7時 大阪フェスティバルホール ⑤

①指揮=ヴァツラフ・ノイマン チェロ独奏=ヨゼフ・フフロ
スメタナ:「売られた花嫁」序曲 ドボルザーク:チェロ協奏曲
ベートーヴェン:交響曲第6番「田舎」
②指揮=ズデニェク・コシュラー チェロ独奏=ヨゼフ・フフロ
モーツァルト:交響曲第38番「プラハ」 ドボルザーク:チェロ協奏曲
チャイコフスキー:交響曲第6番「悲愴」
③指揮=ズデニェク・コシュラー
スメタナ:交響詩「我が祖国」より「モルダウ」「シャルカ」「ボヘミアの野と森から」チャイコフスキー:交響曲第6番「悲愴」
④指揮=ヴァツラフ・ノイマン ヴァイオリン独奏=アイザック・スターン
スメタナ:交響詩「モルダウ」 ベートーヴェン:ヴァイオリン協奏曲
ドボルザーク:交響曲第9番「新世界より」

●6月13日名古屋市民会館●15日広島県立総合会館●17日熊本市民会館●18日福岡市民会館●20日金沢市観光会館●23日岩手県民会館●24日宮城県民会館●26日北海道厚生年金会館●7月1日茨城県民文化センター 一 旅

世紀の巨匠//

アイザック・スターン

ピアノ=アレキサンダー・ザークン

6月12日(水) 7時 NHKホール (チェコ・フィル協演)
6月21日(金) 7時 大阪フェスティバルホール (チェコ・フィル協演)
7月5日(金) 7時 東京厚生年金会館ホール (独奏会)



プログラム:ソナタ集(スケルツォ)ハ短調
シューベルト:ソナタ(二重奏)イ長調作品162
バッハ:無伴奏ヴァイオリン第1番 1番 短調
プロコフィエフ:ソナタ第1番 短調作品80
クライスラー:スケルツォ/前奏曲とアレグロ

●6月15日京都府会館(協奏曲)●17日松本市民会館●19日福井市文化会館●23日群馬県民会館●24日森沢市民会館●26日鹿児島県文化センター●30日熊本市民会館●7月2日吉倉市民会館

新境地の名ピアニスト//

リリー・クラウス

5月28日(火) 7時 大阪フェスティバルホール
6月3日(月) 7時 東京厚生年金会館ホール

《モーツァルトの夕》
サルティの「往年のよう」による変奏曲K.460
アデーレ・ロ短調K.540
小さなジーク ト長調K.574
ソナタ第8番イ短調K.310
ソナタ第11番イ長調K.331「トルコ行進曲」

●5月20日市川市民会館
22日京南市民会館
25日小田原市民会館
27日名古屋市民会館
29日徳島県立文化会館
6月1日長崎市公会堂 一 旅

初来日//ソ連の名ソプラノ

ガリーナ・ピサレンコ

ピアノ=三浦洋一 5月22日(水) 7時 東京 日経ホール
5月27日(月) 7時 大阪 毎日国際サロシ

ヘンデル:「ジュリアス・シーザー」よりクレオパトラのアリア
バーセル:「ディミトリアス」よりザイダのアリア
ベートーヴェン:「アデアライデ」クレール・ヘン第2の歌
シューベルト:「余を紡ぐ女」ト長調/「妹との思い出」イ長調
チャイコフスキー:「私は野に草ではなかつたか」カワロレンスの歌/「かくも早く忘れるは」
ムソルグスキー:「歌曲集」(全曲)

ばあやといっしょ/へやのすみ/かまどとお人形と
/あうへの羽り/いたずら猫/木馬に乗って



心の感度をうたうタッチ。

見事な音のバランス。

世界各国で愛される理由です。

YAMAHA GRAND PIANO



 **YAMAHA**

日本楽器製造株式会社

ピアニストの芸術を生かす絶妙なタッチ。

美しく豊かな音色と見事な音のバランス。

ヤマハピアノは世界各国で愛されています。

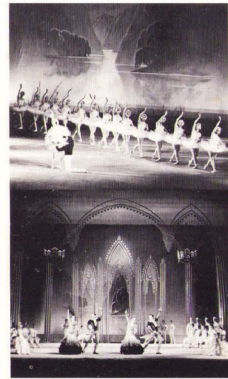
ソ連の三大バレエ団!! ポリショイ・レニングラードと並ぶ名門!!

キエフ・バレエ

詩の国ウクライナより好評再来日!! 優雅・華麗・あふれる詩情!!

白鳥の湖

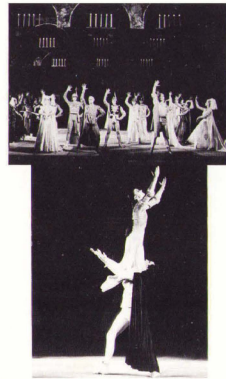
(全4幕・チャイコフスキー曲)
優雅・流麗・格調高く詠いあげる
最高の名作!!
●東京公演=7月27日(土)・28日(日)昼夜・
8月11日(日)昼夜・12日(月)・
13日(火)各夜6時30分開演
(昼は1時30分)
東京文化会館
●大阪公演=7月21日(日)・22日(月)
各夜6時30分開演
フェスティバルホール
●名古屋公演=7月23日(日)6時30分
名古屋市民会館



〈主なメンバー〉
ワレンチナ・カリノフスカヤ
エレーナ・ボタゾフ
アラ・オレホワ
リュドミラ・モルガチョワ
タチヤナ・タキナ
ライサ・ヒリコ
アラ・ラゴダ
イライダ・ルカシヨワ

ロメオとジュリエット

(全3幕15場・プロコフィエフ曲)
豪華大作を天才シェクラによる新演出で
完全上演!!
●東京公演=7月30日(金)・8月14日(月)
各夜6時30分開演
東京文化会館
●大阪公演=8月7日(日)6時30分開演
フェスティバルホール



ヴェアニル・クルグロフ
ワレリー・コフトシ
ワレリー・パルセゴフ
エフゲニー・コスメンコ
ヴィクトル・ルイビー
指揮=ボリス・チスチャコフ
O.リャボス

バレエ名作集

新演出による「カルメン」「夜明けの詩」能バレエ
名場面集と「ゴバック」他名小品!!
「カルメン」組曲(ピゼリ)／「夜明けの詩」
(コセンコ)／「エスメラルダ」／「ドン・キホーテ」
「海と真珠」のバ・ド・ロワ／「ゴバック」他
●東京公演=8月15日(金)／6時30分開演
東京文化会館
●大阪公演=8月9日(日)／6時30分開演
フェスティバルホール



上:「夜明けの詩」より／下:「カルメン」組曲より

各地の予定

7月23日名古屋市民会館	8月18日北海道厚生年金会館
24日長野市民会館	19日山形市民会館
25日新潟市民会館	20日弘前市民会館
31日青森市民会館	21日岩手県民会館
8月1日広島郵便貯金ホール	23日山形県民会館
4日和田歌山県民文化会館	24日千葉県文化会館
5日京都府会館	25日群馬音楽センター
6日金沢市観光会館	その他

クラシック愛好家のためのトップ・セレクター
大阪コンサート協会
〒530 大阪市北区豊崎町新地2-15 ツエビル
TEL:大阪 (06) 343-0647代

◆入場券の優先予約ができます。
氏名・連絡先住所(〒番号)・電話番号をお知らせくだされば、当協会主催の催し物をお知らせし、入場券の優先予約と郵送いたします。くわしくは係におたずねください。

＜ガリーナ・ピサレンコ＞

ソプラノ演奏会
5月27日(月)7時・毎日国際サロ

＜リリー・クラウド ピアノリサイタル＞

5月28日(火)7時・フェスティバルホール

＜テコ・フィルハーモニー管弦楽団＞

●5月14日(金)7時・フェスティバルホール

指揮=ズデニツ・コシチュ

チェロ=ミゲル・フア

●6月14日(金)7時・フェスティバルホール

指揮=ヴァツラフ・ノイマン

ヴァイオリン=アイザック・スターン

＜辻吉之助・指揮演奏会＞

録音記念コンサート

6月19日(火)7時・フェスティバルホール

便利な音楽の総合サービス!!
「NAAコンサート・メンバー」
会員募集中!!

A会員●会費は年額500円です。(4月より翌年3月迄)

- 1.当協会の音楽会等の入場券を、一般発売に先立って電話かハガキで予約申込みすることができます。
- 2.入場券は、費留郵便でお手もとへお送りします。
- 3.入場券の代金は、費留郵便3週間以内に、現金書留でお送りくださるかお近くの郵便局・銀行からお振込みください。
- 4.セクター、コード付、楽譜、ポリドール、キング、CBSソニー、フォノグラムの7社で発売中のレコードは、電話かハガキのお申込みだけで郵送します。
- 5.レコード代金と送料は、現品到着後3週間以内に、現金書留でお送りくださるかお近くの郵便局・銀行からお振込みください。
- 6.A会員には、音楽会等のお知らせと、音楽記事満載の「音楽ジャーナル」を随時お送りします。

B会員●会費は不要です。(4月より翌年3月迄継続)

- 1.当協会の音楽会等の入場券を、一般発売日より後に電話かハガキで予約申込みすることができます。
- 2.入場券は、代金および送料(費留郵便4週間)をお送りくだされば、お返し郵送いたします。
- 3.A会員と同様、レコードの注文もお受けします。
- 4.レコード代金と送料をお送りくだされば、注文のレコードを郵送します。
- 5.音楽会等のお知らせを随時お送りします。

▶入会申込み、その他くわしいことは係におたずねください。

A会員は、会費年額500円を現金書留または切手代で同封の上、お申込み下さい。

N 新芸術家協会

〒105 東京都港区芝西久保明角町17番ビル
電話 東京 (03) 501-6458-9(係直通)

各演奏会についてのお問合せは

東京▶新芸術家協会 TEL:東京(03)501-6458-9(係直通) 〒105 東京都港区芝西久保明角町17 番ビル	大阪▶大阪コンサート協会 TEL:大阪(06)343-0647代 〒530 大阪市北区豊崎町新地2-15 ツエビル
--	--